

ひなゆめファンの止まり木

「ハヤテのごとく！」

第10回クイズ合同本

目次

(著者名は敬称略)

本文挿絵：双剣士

うさぎの喫茶店へ遊びに行こう

著者：ロッキー・ラックーン

3

特徴がないのが特徴

著者：R I D E

17

Chain

著者：双剣士

25

caffeine

著者：春樹咲良

45

Boat house

著者：レン・リー

40

超言理論～Suerspring theory～

著者：ピーすけ

51

著者あとがき & メッセージ

60

編集後記

65

奥付

65

本書は、「ひなゆめファンの止まり木」における第10回クイズ大会(2016年11月19日)にて上位を取った方々による、合同小説本です。

公開サイト：ひなゆめファンの止まり木

<http://soukensi.net/perch/>

クイズ企画の趣旨説明と結果ページ

<http://soukensi.net/perch/sp/quiz10/>

うさぎの喫茶店へ遊びに行こう

著者・ロッキー・ラックーン

【まえがき】

今回もハヤテ以外のキャラクターに登場してもらってますので簡単に紹介します。

「ご注文はうさぎですか？」

NO.1先生による4コマ漫画。木組みの家と石畳の街の喫茶店「ラビットハウス」とそのまわりを舞台に、女の子たちが営業に、また学業に頑張っていくお話。

「香風 智乃（かふうちの） || チノちゃん」

このSSの主人公。喫茶店ラビットハウスの今は亡きオーナーの孫であり、看板娘の中学2年生の少女。学校へ行く時以外はいつもティッピーというアンゴラうさぎを頭に乗せている。今のラビットハウスの経営は父のタカヒロが受け持っているが、ゆくゆくは自分がその役目を背負いたいと思いき進んでいる。主人公のココアによく振り回されているが、満更でもないご様子。

「ティッピー || おじいちゃん」

アンゴラうさぎでお店のマスコットの存在のティッピー。実はチノちゃんのおじいちゃんの魂が入っていて、チノちゃんとお父さんだけがその事を知っている。なぜそのような事態になったのか、原作でも明かされていないがあまり重要な事ではないようである。よく渋い声で喋るが、チノちゃんの腹話術という事で通されている。ちなみにティッピーの性別はメス。おじいちゃんの生前からラビットハウスで飼われているらしい。ますます謎である。

「ココアとリゼ」

ラビットハウスの従業員たち。二人とも高校生だがそれぞれ別の学校に通い、リゼの方が1つ先輩になる。ココアは香風家に下宿をしていて、リゼはアルバイトとして働いている。チノちゃんを家族として、先輩としてそれぞれ支えている。

「青山ブルーマウンテン」

ラビットハウスの常連客の小説家。ちなみにブルーマウンテンはペンネームで、本名は青山翠（あおやまみどり）。

年齢は謎であるが、高校生の頃からの常連客でチノちゃんのおじいちゃんとは知り合いだった。卒業後はしばらく来ていなかったため、彼の訃報は知らなかった模様。自身の作品に、身近な人間をモデルにする事が多く、チノちゃんのおじいちゃんを主役のモデルにした「うさぎになったバリスタ」は映画化されたヒット作。おっとりとした性格でありながらも、破天荒な行動に出る事もしばしば。アリスちゃんとウマが合う様子で、ヒナギクとハヤテを振り回す素質は十分にありそうだ。

※いつもの但し書き

ハヤテキャラは掲示板の作品「しあわせの花」の設定です。ハヤテとヒナギクがアリスちゃんに振り回されながらも恋人同士でなんやかんやとやっています。

それではどーぞ！

トハウス」の次期マスターとして日々精進しています。今日はウチに下宿しているココアさんは千夜さん（クラスのお友達）とテスト対策の勉強会、アルバイトのリゼさんはシャロさん（学校の後輩）と部活の助っ人で二人ともお休み。マスターの父は商店街の集まりで外出。夕方の営業は私一人とティツピーでこなさなくてはなりません。と言っても割と珍しい事でもなくて、月に1〜2回はそんな日があります。お客さんも多い時期ではなく普通に切り盛り出来るので心配はありません。

せいかん

「いらっしやいませー！」

さて、今日の初めてのお客さんがご来店です。はりきって営業します！

【うさぎの喫茶店へ遊びに行こう】

こんにちは、香風智乃と言います。この喫茶店「ラビッ

「わあ、素敵なお店ですわね」

「そうでしょ？昔来た時と変わらないわね〜」

「えーと、2名様ですか？」

「ハイ」

本日最初のお客様、綺麗な金髪のお姫様みたいな幼稚園児くらいの女の子と、ちよつと歳の離れた：ココアさんたちと同じ高校生くらいのお姉さんの姉妹連れです。

「ご覧のとおり、お客様の貸しきり状態です。どこでも好きなお席へどうぞ」

「あの：」

「はい？」

お姉さんの方が席に座らずに私に話しかけてきました。

「今日はマスター：お髭を生やされた素敵なおじ様はいらっしゃいませんか？10年位前に来たときにとても可愛がってもらったのでお会いしたくて：」

「ああ：」

今でもこのお姉さんのおじいちゃんを訪ねて来店してくれる人がいます。なのですが：

「それは私の祖父ですね。残念ながら2年ほど前に亡くなって：」

亡くなったのは亡くなったのですが、今はこのティップーの姿になって私たちを見守ってくれています。お父さん以外の人にはこの事は秘密です。

「そうだったんですか：ごめんなさい：」

「あ、でも今は孫の私が、祖父に教わったコーヒーでもてなしさせて頂きますので是非ゆっくりしていただくさいね！」

「：ええ。期待しているわ、マスターさん」

このラビットハウスの次期マスターとして、おじいちゃんのコーヒーを求めて来てくれた人にも満足して帰ってもらわなければなりません。頑張ります！



「お待たせしました、キリマンジャロとホットココアです」

「はい。ココアはそっちの娘に、コーヒーは私です」

「はい、ではごゆっくりどうぞ」

「ちよつとよろしいですか？」

「はい、なんででしょうか？」

お二人のご注文の品を運んだタイミング。今度は妹さんの方が私に話しかけてきました。

「貴女の頭に乗っているのはなんですか？」

「これはアンゴラうさぎのティッピーです。この店のマスコットの存在です」

妹さんは不思議そうにティッピーを見つめます。うさぎが珍しいだなんて、きっとこの街の人じゃないのだと分かりました。

「飲食店に生き物というのは衛生的に大丈夫なのか？」

「えっ？」

今まで誰も気に留めなかったですが…うさぎってダメなのでしょうか？

「アリス、問題なんか何も無いのよ。レジ上のところに、飲食の営業許可と、ペットショップと同じ動物取扱業の登録表示があるわ。東京にも『猫カフェ』とかあるでしょ？アレと同じで、ちゃんと飲食についても、うさぎについても保健所からの許可を受けているのよ。でもアリスの言う通り、動物を携わらせている点からかなり厳しい基準をクリアしてると思うわよ」

「そうなんですか、ヒナ」

妹さんの質問に困っている私を見て、お姉さんが助け舟を出してくれました。ちゃんと保健所の許可も取っているだなんて知らなかったです。こういうのはお父さんが全部やってくれていたんですね。

「すみません、店員の私も知りませんでした」

「いえ、うさぎが身近にいるこの街の人には当たり前前の光景だから仕方無いわよ。私も前に来た時になんでだろうって思ったから調べておいたの」

ニコニコと私の無知を許してくれるお姉さん。なんだかとても安心できる雰囲気を出してくれる人です。と、急

に妹さんが私のスカートの裾を握ってきました。

「あの…良かったらティッピーさんをもふもふさせて頂
けませんか？」

「もふもふ…ですか？」

モジモジしながら聞いてくる妹さん。きっと最初からテ
ィッピーを触ってみたかったんですね。

「ええ、もちろんいいですよ」

「わあ〜！ありがとうございます！」

私の頭からティッピーを下ろして妹さんに渡すと、とて
も嬉しそうに撫でてくれました。

「すごくあったかくて…もふもふですわ！」

「良かったわね、アリス。マスターさん、ありがとうございます
ございます」

「いえいえ、ティッピーも喜んでますし」

もふもふしたり追いかけてっこをしたりと、すっかりティ
ッピーと仲良くなった妹さん。…というかさずがおじい

ちゃん。お子様にはめっぽう強いです。

「良かったらこの街について色々教えて貰えませ
んか？」

「はい。お店も暇ですし、何でもお話ししますよ」

◆

「私は香風チノといいます。よろしくお願ひします」

「私は桂ヒナギク。よろしくね、チノちゃん！」

「その娘のアリスですわ」

…ん？私の聞き間違いでなければ今おかしな事を言っ
てましたよね？

「えと…アリスさんは、ヒナギクさんの…？」

「む・す・め！ですわ」

「ええーっ！？」

ヒナギクさんはどう見ても高校生…よくて大学生くらい
にしか見えません！それなのにこんな大きなお子様が
いるなんて信じられません。

「し、失礼ですがヒナギクさんはおいくつなんですか？」
「あ、ゴメンねチノちゃん。アリスは養子みたいなもの
で、実の娘って訳じゃないの。見た目どおり、私は16歳
の高校生よ」

「そうだったんですか。それにしてもビックリしました」
「アリスも紛らわしい言い方をして困らせたりしない
の！」

「事実を言っただけですわ♪」

なんの悪びれもないアリスさん。そのやりとりを見て、
彼女は振り回し隊で、ヒナギクさんは振り回され隊の人
なんだと分かりました。

「この街には観光ですか？」

「ええ、家族で旅行に来ているの。何回か来てるけど、
ココは本当に素敵な街ね。アリスもすぐに気に入ったで
しょ？」

「もちろんですわ。もふもふ…」

ここは「木組みの家と石畳の街」と呼ばれるほどに、独
特の景観を楽しめる観光地としても有名だそうで、うち

の営業もそうだった観光客の人からの売り上げは多いで
す。さっきの会話から察するに、お二人は大都会東京か
ら来たようですね。

「ヒナギクさん、ラビットハウスに昔いらっしやったっ
て言ってましたよね？」

「10年くらい前ね。ウチの両親が喫茶店を昔やってて、
チノちゃんのおじいちゃんにすごくお世話になったから
って挨拶に来た事があったの。…あ！私、チノちゃんと
その時に会ってたわよ。思い出したわ」

「えっ、そうだったんですか!？」

「大人たちが話してる間、近くの公園でうさぎと遊んで
…そこで会った私と同じ年の子とも仲良くなつたわよ
ね」

「うーん、思い出せません」

「まあチノちゃんその頃3歳とかだし、仕方無いわよ」

記憶力にはわりと自信があったのですが、幼少の頃の話
なら仕方ありませんね。ヒナギクさんの安心できる雰
囲気が初めてじゃなかったのは、この頃のかすかな記憶
のおかげだったのだと分かりました。

チリチリーン

「あ、お客様が来たのでまた後でお話しましょう」

「うん。頑張ってるね！」

お二人が来てから30分くらい。ようやく二組目のお客さんの来店です。

「いらっしやいませー。何名様ですか？」

「3人です」

「こっちも3人です」

「ウチは4人やで」

「こっちは5人でごわす」

「私たちは7人かも」

「えっっ？」

一組だけかと思いきや、なんかお客さんが入り口の外まで並んでいます。これみんなウチに来たお客さんなんですか…？こんなクリスマスの時ですら無かった光景です。私一人で…というか、ココアさんリゼさんがいてもさばくのは大変です！

どどどどーしましょう…？

◆

「あらあら、いきなりお客であふれ返ってしまいましたわね。コレではチノさん一人では物理的に無理ですわね。…ヒナ？」

「うん、分かってるわよ。ハヤテに連絡つけてといてね」
「ええ、ではコレをどうぞ」

◆

「あの、今お店は私一人で…お待たせしてしまっても大丈夫でしょうか…」

「チノちゃん！」

「えっ、ヒナギクさん!？」

お客さんの案内に追われてる所に話しかけてきたヒナギクさん。なぜかココアさんの制服を着ています。

「その服は…？」

「そんな事はいいいから、ココは私がホールを見るわ。チ

「ノちゃんはカウンターへ！」

「えっ!?でも…」

「ラビットハウスをたくさんの人に好きになってもらうチャンスでしょ? 私なら現役の喫茶店アルバイトだし、メニューも覚えたから大丈夫。お姉さんに、まっかせなさい！」

「ヒナギクさん…。では、よろしくお願いします！」

私は今、どうやって目の前のお客さんに待ってもらおうかしか考えてませんでした。ヒナギクさんの言葉で気付きました。ここはたくさんの人にラビットハウスを好きになってもらう大チャンスです。次期マスターとしての自覚が足りませんでした。

「お姉さん、オーダーお願いしますーす」

「はい、ただいまー！」

「次こっちお願いします」

「はい、少々お待ちください！」

「マスター。3番さん、ブレンドツ、シヨコラワン、お願いします！」

「かしこまりましたー！」

「ヒナギクさん、3番さんのブレンドツ、シヨコラワン、ありがとうございました！」

「はい、ただいま!…お待たせ致しましたー!ラビットハウス特製ブレンドご注文のお客様…ホットココアご注文のお客様…はい、こちら失礼します…ごゆっくりどうぞ！」

すごい。ヒナギクさん、初めて一緒に働くのに私と息びつたりです。接客もオーダーの「通し」も全く問題無いです。しかも初めて働くお店なのに、ベテランのリゼさんよりも動線に無駄がありません。

あと、私の事を「マスター」と呼んでくれます。初めて呼ばれるので照れくさいですが、ちょっぴり嬉しいです。

「あっ!こぼしちゃった!店員さん」

「お待たせしました、こちら拭きますので失礼します。」

お召し物は大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます。すみません、代わりに同じものを…」

「かしこまりました！」

「マスター、7番さんアイスこぼしちやっつて、サービス
出来ます？」

「もちろんです。アイスあがりました」

「はい…お待たせしました！お客様、こちらのアイス
コーヒーはマスターからのサービスですので伝票はこの
ままで…」

「えっ、でもこぼしたのは僕なのに、悪いですよ」

「では、その一杯分はまた次にいらした時と言う事で
…♪ごゆっくりどうぞ！」

「すみません、ありがとうございます。必ずまた来ます
ので…」

トラブルの対応も言う事無しです。これであのお客さん
はヒナギクさんの接客に満足して、リピートしてくれる
に違いありません。ここでの一杯分のロスを支払わせる
よりも、サービスをする事で良いお店だと思ってもらい、
2回3回と通ううちに、ゆくゆくは常連さんに…という
のが客商売のあり方というものです。最近父からそんな
考え方を教わりました。

「それにしても、普段の喫茶どんぐりなんて暇な時しか
無いのに、よくこんな忙しいホールがさばけますわね」
「すごいですね、あの方。ラビットハウスの新人さんで
すか？」

「ん？どちら様ですか？」

「私、この常連の青山ブルーマウンテンと申します。

良かったら話し相手になつて貰いたいなー、なんて…」

「ええ、私も退屈してましたので喜んで！ですわ。私は
アリスと申します」

いつの間にかヒナギクさんの座っていた所に青山さんが
…アリスさんと楽しそうにおしゃべりしています。

「ウェイトレスって、ホールを舞うアイドルであると同
時に、ホールで戦うファイターなんですよねー。あのヒ
ナギクさん、蝶のように舞い蜂のように刺す…とても魅
力的なウェイトレスですね」

「アイドルでファイター…。ヒナにぴったりの表現です
わね。さすが小説家さん！」

「あ…なんだかとても創作意欲が湧いてきました。アリ
スさん、彼女について色々教えてもらえませんか？」

「ええ。私の知る事でよければ、な・ん・で・も！お教

えしますわ♪」

お二人がのんきな話をしているうちに、山ほどあったオーダーがみるみるさばけていきました。お客さんの帰るとき表情はみんなとても満足げで、お見送りする度に嬉しくなりました。



「ふう、これで夕方は閉店ですね」

「そうね。お疲れ様チノちゃん」

すっかり日も暮れて、気付けば閉店時間の6時を過ぎていました。結局あれから客足が途絶えることなく、ヒナギクさんに頼りきりになってしまいました。でも、今まで一番お客さんに喜んでもらう事を考えながら働けた一日だったと思います。

「ヒナギクさん、今日は本当にありがとうございます！」

「いえいえ、忙しくて私も楽しかったわ」

「3時間も働いてもらって…。その分だけでも、お給料

を出させて貰おうかと…」

ヒナギクさん一人でココアさんリゼさんの二人分以上の働きをしてもらったので、申し訳無いと思いつつ申し出ましたが…

「大丈夫よチノちゃん。私が好きで勝手にやった事なんだし」

「でもそれじゃ私、お世話になりっぱなしで…」

ヒナギクさんは親切で手伝ってくれていたので想像したとおりの返事をされてしまいました。

「私の両親がチノちゃんのおじいちゃんにお世話になったって言ったでしょ？その分を私がチノちゃんにお返ししたって事にしましょう」

「でもそれじゃあ…あ、じゃあせめてお夕食を食べていただく下さい！お迎えに来るご家族の方も一緒に！」

私の「夕食」の言葉に、ティッピーと遊んでいたアリスさんの表情が輝きました。

「ヒナ、チノさんにも『めんつ』ってものがありますわ。

ここは素直に喜んで頂くというのがレディーのマナーでしてよ？もふもふ」

「アリスはご飯が食べたいだけでしょ…分かったわ。じやあ一緒に作りましょう？チノちゃんも疲れてるだろうし、忙しくてろくに話も出来なかったからおしゃべりもしつつ…ね！」

私が疲れているのもヒナギクさんにはお見通しでした。

私の申し出を断る事無く気遣ってくれる絶妙な答えだと思いました。

「…ハイ。ではお言葉に甘えさせていただきます」

◆
喫茶店から私の家のキッチンに移り、ヒナギクさんとお料理です。テーブルではアリスさんとティッピーが今か今かと待っています。ホールでのたまたま想像はしていましたが、ヒナギクさんはお料理も上手です。ココアさんの大好物のオムライスが次々と仕上がっていきます。

「ヒナギクさん、そういうば聞き忘れてましたがその制服…」

「ヴェアアアア!! 私の制服を着た美人さんがチノちゃんと仲良さそうにしてるうー!!」

私たちの会話をさえぎって出てきました、いつもお騒がせのココアさんです。まったく、帰ってきたら「ただいま」が最初のはずでしょう。

「あ、おかえりなさいココアさん」

「チノちゃんどーゆーこと!?! 私、またリストラされちゃうの…?」

「ええ…? ヒナギクさんは今日お店が忙しかった所を親切で手伝ってもらったんです」

またよく分からない事を言い出すココアさんにはちよつとイジワルしたくなっちゃいます。

「でもココアさんより数倍働けるから、ホントにリストラしても良いかもしれないですね」

「ヴェアアアア!! しょんなく…」

「フフツ、面白いココアさんですね」

期待通りの反応を見せてくれて、ちよつと満足です。

「ココアさん、お客様にご挨拶してください」

「私、保登心愛です！よろしくね！」

「私は桂ヒナギクです。それとこっちは…」

「その娘のアリスですわ！もふもふ」

さつきと同じやり取りをするアリスさん。いつの間にかティップーを頭に乗せて、完全に懐いてしまってます。

「ヴェエエエエ!? ヒナちゃん私と同じくらいの歳に見えるの!! アーたんはいくつなの? とりあえず、私の妹になろつか?」

「ココアさん、いきなり馴れ馴れし過ぎます。あと『ア

ーたん』はセンスが無いと思います」

「私のモットーは『会って3秒でトモダチ!』だからね!」

『アーたん』って、センス無いかしら…?」

私の言葉にキョトンとした顔を見せるヒナギクさん。何

か思う事があるのでしょいか?

「よろしくね、ヒナちゃん! アーたん!」

「ええ、よろしくねココア」

「ココアお姉ちゃん! ですわ」

「きゃ〜! 可愛い妹より! もふもふしてしんぜよう〜!」

可愛らしく返すアリスさんにココアさんもメロメロです。本当にこの人は年下なら誰でもいいのですか!?

とりあえず自己紹介も終わったところでお料理再開です。テーブルにココアさんが加わってアリスさんともふもふイチャイチャしてるのなんて気になりません。

「ところで、ヒナギクさんはどこでその制服を…?」

さつき聞こうとしていた事をもう一度。多分、ここまで読んでくれている方はみんな気になっていると思います。

「ああ、チノちゃんが忙しそうになった時にアリスが持ってきたのよ。どこから持ってきたのアリス?」

「そちらの服でしたらお手洗いの扉の前にありましたわ

よ。チノさんのものと色違いだから、すぐに制服と分かったのでヒナに…」

「あ…」

アリスさんの言葉に、ココアさんのもふもふの手が止まります。この前も同じ事をして注意したばかりなのに、まったくココアさんはしようがないココアさんですね。

「ココアさんまた制服を置きっぱなしにしてたんですか!? 開店前に確認しなかった私も悪いですが、いい加減にしてください!」

「うわーん、チノちゃんにまた怒られたー!」

「はあ…まったくココアさんはやれやれです…」

いつもの香風家のやり取りに、お二人も苦笑い。そうこうしている間に夕食はヒナギクさんがほとんど仕上げてくれてしまいました。このあと、お二人を迎えに来たヒナギクさんの彼氏さんも来て、とても賑やかな夕食を皆で楽しみました。

ヒナギクさん、アリスさん、今度会う時はもっと立派なバリスタになれているように頑張ります。またラビット

ハウスに来てください!



「ヒナさん! 最近ヒットしてる小説の主人公がすっごくヒナさんに似てるんだけど知ってる?」

「え? 何の事かしら?」

「これこれ。青山ブルーマウンテンって最近流行ってるんですよ」

•
•

「アリス! この前の旅行の時に青山さんに何を話したの!?」

「え? ヒナの事を色々知ってたので、ちよっとだけ私の知る限りの事をお話ししましたわ」

『ちよっとだけ』って、本まるまる一冊分も喋ってるじゃない! ああ…これじゃ外を出歩けないじゃないの〜!」

「やれやれ、有名人はタイヘンですわね〜」

青山ブルーマウンテン著『アイドルは生徒会室に』絶賛
発売中です。(ウソ)

【おわり】

特徴がないのが特徴

著者…R I D E

初芝宅。そこで使用人たちは世話足なく会話したり足を速めて移動していたり。

そんな状況の中、法仙夜空は主のもとへ向かっていた。三千院の遺産を自分たちの手に収めるために、ついに動き出す番である。

だれにも渡さない、必ず。

使用人たちが後ろで何故か首を傾げているのを背に、夜空は主、ヒスイの部屋へと入った。

「夜空か」

ヒスイは法仙に見向きもせずに応じる。その背中は、自身に満ち溢れていた。

「帝おじい様が遺産相続について、新たに動き出すようです」

孫娘であるナギに相続権を戻したり、遺産相続に重要な「最後のゲーム」をはじめようとしたり。

「おじい様に、お話つけてはいかかがですか？」

まるでヒスイを焚きつけるように声をかける法仙。

当然であろう。法仙には遺産が必要だ。ヒスイにはその気になってもらわなければならぬ。

「では、おじい様に聞いてくるか」

そして帝邸。

遺産相続の部屋には帝、ハヤテの二人がいた。そこへ、ヒスイと夜空が入っていく。

「あ、あなたは…」

夜空の顔を、ハヤテは真っ直ぐに見た。

「あら、お久しぶりね綾崎君」

夜空とハヤテは一度面識がある。その時十分に挨拶し、それからも素性を隠してだがハヤテに対して暗躍してきたので夜空は十分ハヤテのことを覚えている。

だが、ハヤテの方は…。

「えっと…、どなたですか？」

一瞬、何を言われたのかわからなかった。しばらくしてようやく理解できた。

この男は、自分のことを忘れている。

その瞬間、怒りをぶつけそうになった。だが、ここは抑えて笑顔を取り繕う。

「ひ、ひどいですね。あなたに近づきたくて、アパートまで来たというのに」

「そうですか？」

ハヤテは考え込むが、帰ってきた答えは…。

「すみません、全く覚えていません」

「！この…」

申し訳ないというような感情を見せず、ただ淡淡と語るものだからつい怒鳴りかけてしまう。

だが、ハヤテだけではなかった。

「あまりパツとしないメイドだな。なんというか、キャラが薄い？」

初めて顔を見せ、いきなり駄目出ししてきた帝。

初対面の相手にそんなことを言うてくるので、彼女のフラストレーションは貯まっていく。しかし、彼だけではなかった。

「確かに、一緒にいる私も同じようなことを時々思うな」
なんと、自分の主であるヒスイまでもが同調してきた。

「キャラが薄いというか、個性が見当たらない？とにかく、どんな奴だか忘れてしまうこともある」

一緒に生活しているヒスイにそんなことを言われ、法仙はもう怒鳴る気力を失せてしまった。

もう、何を言っても意味がない。

その後、ヒスイが遺産相続について難癖をつけ、ハヤテと帝に因縁をふっかけたのだが、夜空はそれを他人事のように感じていた。

確かに、自分の思うとおりに物事は進んでいる。だが、

満足感よりもショックの方が大きかった。

ヒスイは獲物をみつけた動物のように機嫌よく帝邸から出ていくが、彼女とは対照に夜空は不機嫌なまま帰るのであった。

帰宅後。

夜空は自室で自分のことについて思い返していた。自分はそんなに印象の薄い人間だったのだろうか。

思えば使用人たちがすれ違うたびに背後でひそひそと話していたのは自分のことだったに違いない。誰だっけ、とか言う言葉も微かながら聞こえていたのだから。

それにしても、忘れられたなんて扱いがあまりにもひどすぎる。

確かに、自分はそれほど強く自己主張してきたわけではない。だが、それはハヤテたちに対してであって共に生活しているヒスイや使用人たちまでそんな風に言われるなんて思わなかった。

だが、ふと疑問を抱いた。

自分の個性やキャラって、そもそも何なのだろうか。

「…わからん」

考えてみたが、自分ではわからなかった。自分でもわからないようでは皆に忘れられてしまうのも無理はない。

「これは、もう一度じっくり振り返る必要があるな」

翌日。

夜空は一人屋敷から出かけていた。遺産相続争いの中、ハヤテたちがどういった動きを見せるか偵察もしなければならなかったし、何より昨日の出来事が響いていた。

自分の個性やキャラが薄くて、存在を忘れられた。それは夜空にとってかなりショックだった。

だったら、今からでも自分のキャラを確立すればいい。そして、誰にも負けないキャラとして自分を表へ出すのだ。

幸い、自分にはその候補がある。

それは、あまりにも身近すぎて気付けなかった。

「私はヒスイのメイド。ならばメイドキャラでいけばいいではないか」

そう。メイド服を着用している今の自分はメイド。メイドらしさを自分で出していけば、自分の印象も強まるに違いない。

なんでこんな簡単なことに気付けなかったのだろうか。これでもうキャラが薄いだなんて言われるものか。

しかし、その思いは早くも打ち砕かれることとなる。商店街まで歩いていると、夜空はある人物を目撃する。

「あれは…」

別に対面してもよいのだが、暗躍していた時の癖でつい物陰から隠れて動向を伺ってしまおう。

「確か、三千院ナギのメイドだったな」

そう、マリアが買い物していた。屋敷からの買い出しだろうか。

彼女が手にしているのは、食材と、布。

「布…？あれは一体…」

気になった夜空はそれを見、それから彼女の服に目を移すことで理解した。

「まさか、メイド服の素材…!？」

遠目からだが間違いない。彼女が今着ているメイド服とあの布は同じ材質だ。自分の目利きに間違いない。

まさか、あのメイド服は彼女の手作りだということか。

それを知った時、夜空は何故か敗北感を味わっていた。

自分が来ているメイド服など、上質であることは変わらないがどこで支給されたものかわからないものだ。対して、マリアは服まで自分で調達している。

そのメイドの徹底ぶりに、夜空は打ちのめされてしまおう。

「い、いや！自作というだけでは強いキャラとは言えん！あれよりも私がメイドキャラとしての印象を残すチ

ヤンスはまだあるはず！」

そう自分を奮い立たせる夜空だが、彼女にはさらなる追い打ちが待ち受けていた。

しばらくして、「コミックタチバナ」の前に来たときである。

店の前で売り子をしている喜嶋サキを見た。彼女の仕事着はフリルの付いたミニスカートのメイド服。可愛い系という奴か。

しかし、なんというかかなり非効率な仕事をしているな。愛想はいいがあんな不手際ではやっていけないだろう。

仕事ぶりを評価している最中に、サキが店の中へと入っていった。そういえば昼の時間帯だから、休憩に入るのだろう。

しばらくしてから、サキが店から出てきた。その姿に、夜空は目を見張った。

なんと、サキは別のメイド服に着替えているではないか。先程のものよりも裾の長いスカートの、しっかりとしたタイプで有能そうな印象を与える。実際は見た目だけだが。

まさか、普段着用と仕事着用のメイド服を着分けているというのか…。

夜空は自分の敗北が決定的と捉えていた。自分では、あの二人のような徹底ぶりにはできない。あそこまでメイドに全てをかけることなど無理だ。

メイドというキャラでは、負けてしまおうと確信するのだった。

敗北感に打ちのめされた夜空だが、すぐに気持ちを切り替えることもできた。

それは、一冊の漫画本からだ。その後、「コミックタチバナ」へ気晴らしに入ったところ、とある漫画が目に入った。

それはいわゆる、魔法少女ものであった。不思議な力をもった主人公が、魔法少女というキャラをうまく表現していたものであった。

これを見た夜空は、これだと思った。自分にも、神様の真似ごとのようなことができる。これをうまく利用すれば、自分のキャラが確立できる。

そう思った時は、とある神社にいた。

「まずは練習してみようか」
漫画のようにやってみようとした時だった。

「さ、こちらです」
どこからか声が聞こえてきた。

顔を巡らすと、遠くの方でこの神社の神主と思われる男が誰かと喋っている。

和服の、黒髪の少女。あれは…。

「鷺ノ宮伊澄？」

伊澄は神主の言葉に何度か頷いた後、呪符を取り出した。そしてそれを投げつける。その先には、無数の妖怪の類が。

「どうやら、妖怪退治のために神主から依頼されたらしい。」

全て終わった後、伊澄は大きな犬のような動物を呼び出し、それに乗って帰るのであった。

一連の流れを見ていた夜空は、ここでも敗北を味わった。

不思議な力、癖のある性格、動物たちの同伴。

魔法少女キャラに必要なものが完璧にそろっている。

自分ではできない。

キャラ作りに勤しんでいる夜空は、一度は実力で勝った相手にキャラで負けるというおかしな逆転劇に、そんなに真剣に捉えなくてもいいのに思わず膝をついてしまう程の悔しさを感じるのであった。

負け犬公園。

そのベンチで夜空は完全にうなだれていた。あれから色々なキャラを考えてみたが、どれも自分には相応しくないものだった。

このまま自分は、誰にも覚えてもらえないキャラとなってしまうのだろうか。

忘れられることが特徴のキャラ。それは絶対に嫌だ。どうすれば…。

「困っている人、発見！」

突如として耳に響いた声に、夜空は驚いてしまう。

「だ、誰だ！」

敵かと思ひ、慌てて身構える。

が、相手の顔を見た瞬間敵意は失せてしまった。

「困っている人を助けるライフセイバー、日比野文です！」

自分より小柄で、間の抜けた表情をしている彼女は、

どう見ても敵ではない。

「ライフセイバー？」

「そうです！あなた、美人なのにぱっと見影の薄そうなお印象の上に困り顔をしていましたね！しかし安心してください！」

出合いがしらにこちらの痛に障る言葉を述べてくるのだ。軽く怒りがこみ上げてくる。

「文が来たからには、あなたのお悩みなど瞬く間に解決してみますよ」

何を言っているのだ、この女は。

この女では、逆に袋小路に陥る予感しかない。いや、予感などしなくても断言できる。

「悪いけど、私は…」

「いいから、さっさとお話ししやがれですよ！」

鬱陶しい奴だ。

けどこのまま一点張りでは絶対に離れないだろう。ならば悩みを打ち明け、適当なところで切り上げるとするか。

「聞いていいですか？」

「ふあい！」

「他の人たちよりも印象の強いキャラで自分のことを知ってもらいたいんだけど、自分だけのキャラというのがわからないのよ。キャラ作りに手伝ってくれる？」

それを聞いて、文の元々つぶらな瞳が更に丸みを帯びていった。

「シャルナちゃん、シャルナちゃん、いかにも残念な人が考えそうな悩みがきましたよ」

一歩後ろにいた肌黒の少女に耳打ちしてきた。

おい、声がこっちにも聞こえているんだよ。

「確かに、少し理解が難しい悩みね」

「でしょ。シャルナちゃんがツッコミだけじゃなくてもまにはボケたいとその手の本を買って練習しているのと同じ…」

言い切る前に、シャルナが文を殴打した音がある場に響いた。

「今聞くのはあの人の悩みでしょ、文ちゃん」

「そ、そうでした…」

気を取り直して、文は夜空に向き直った。

「自分のキャラを作りたんですって？」

「え、ええ」

この女に尋ねたこと事態間違いではないのだろうか。段々と不安になってくる。

「安心してください！文に任せればたちまちあなたは文のように人気者になりますよ！」

彼女のように、というのがちよつと引っかかるが、大した自信なのもしかしたら、と思ってしまう。

「まず最低条件として、自分に自信を持つことです！自分に自信を持てば、アピールすることができるのですから！」

ふざけた態度の割には、もっともなことを言う。夜空は感心すると同時に頭の中で彼女の言葉を教訓として刻

みこむ。

「そして！誰にも負けないキャラを作りたいというのなら、うってつけがあります！」

こほんとか払いをする文。夜空も固唾を飲んで次の言葉を待つ。

「アイドルを目指しましょう！」

一瞬、理解ができなかった。何故、そうなる。

しかし夜空を置いておいて文は説明をはじめた。

「アイドルは超個性の人たちがいっぱいです！アイドルになればあなたはたちまちキャラが出て文のような人気者になるはずです！」

なるほど、人気者かどうかはわからないがこの女は個性に恵まれている。一癖も二癖もあるが、言うことには納得できる。流星はポジティブ。

しかしここで文の希望をシャルナが打ち砕く。

「けど、アイドルは強烈な個性がないと知名度上がらないと思うけど」

そうだった。そもそもそのことで悩んでいるのだ。文の提案には問題を解決できるものではない。

「そうですか？文はそんなこと考えたことなかったものですか」

本当にアイドルになれるかどうかは別として、確かに

この女ならそんな闇など必要ないだろう。

「うーん、こんなキャラどころか幸も薄そうな人にとやうって個性を強めればいいのでしょうか…」

人がこんなに悩んでいるのに、なんだか腹立ってきた。一発殴ってやろうか。

「安心してくださいマスター。私にいい考えがあります」

この場に人が増えてきた。その人物に文は驚いて見せる。

「ああ！おまえはうちのポンコツアンドロイド！」

「イエス！アンドロイド！アンドロイドシイ！」

また変なのが現れた。

「マスター、私にいいアイデアがあります」

「いいアイデア？」

胡散臭そうだが、とりあえず聞いてみることに。

「決め台詞を作りましょう！」

決め台詞？なんだそれは？

「たった一フレーズですが、それが全てを物語る！そんな決め台詞があれば強烈なインパクトを残せます！」

「よくそんなことがわかるわね」

シャルナの疑問にシイは当然と言わんばかりに応える。

「一日中テレビを見て研究しましたから」

「暇人かよ！」

文は怒りをシイに向ける。

「ともかく、彼女に必要なのは決め台詞なのです」

「確かに、それなら簡単にキャラができるかもしれないね」

あまりにもデコボコなやり取りだが、決め台詞云々は会得してもいいかと思う夜空であった。

「では、ゲツツとかはいかがですか？」

「いやいや、そんなの関係ねえなんていいと思います」

「それは決め台詞というより、一発ギャグよ二人とも」
「…やっぱりやめようかな」

月日がたったある日。

「さて、今年の流行語大賞は、法仙夜空さん！」

夜空はなんと、流行語大賞を得るまでのキャラを得ていた。

彼女は喜びに満ちていた。ここまでの舞台に立てるほどのキャラを手に入れたのだ。もう誰も自分のことなど忘れることなどない。

だが彼女は知らなかった。

流行語大賞に選ばれたものは、一発屋になるのが多いと。そして、一発屋は消え去るのが運命だということも。

法仙夜空は、まだまだ苦勞するのであった。

※ 本作は冒頭の段落のみ、来年二月発売予定の単行本五十巻のネタバレを含みます。

「私……メイドを辞めようと思うの」

十ヶ月前にハヤテとマリアが初めて出会った、薄寒い風の吹く夕方の負け犬公園にて。買い物帰りに二人で訪れた思い出の場所で、二人きりになったマリアは思いがけない言葉をつぶやいた。

「メイドを……辞める？ 辞めるって……お嬢様の？」
(コクリ)

「な……なんで……なんで、どうして!？」

突然の告白にハヤテは動揺を隠せない。とある目的のために彼が建っていた『マリアさんを自分にメロメロにさせてから振る』という計画は一瞬にして木っ端微塵に吹き飛んだ。こんな日が来るなんて信じられない、信じたくない……思わず声を荒らげる少年執事に、完璧メイ

ドは至って冷静に言葉を返す。

「ハヤテ君も言ってたじゃないですか。もう……役目は終わったんです」

「終わったって……」

「きっかけは、ルカさんとの同人誌対決でした」

マリアは蕩々と理由を語る。自分が側にいないとダメな子だと思っていたナギが成長を遂げ、かけがえのない友達を得ることもできたこと。このままだと自分はナギを支える姉代わりではなく、本当に料理や掃除をするだけの単なるメイドで終わってしまう……それは嫌なのだ。自分はナギの特別であり続けたい、そのためには決断が必要なのだと。

「で……でも!!」

「ハヤテ君、覚えてます？」

理屈はそうでもお嬢様の気持ちは、家族としての愛情は……そう反論しかけたハヤテを制するように、マリアは曇りのない笑顔で少年に微笑みかけた。

「私もうすぐ……十八になるんですよ？ 卒業です。だから笑顔で見送ってください」

《……ふう。ハヤテ君、あれで騙されてくれたかしら?》

衝撃の告白の後。ハヤテとは別の道を通って家路にいたマリアは、さきほど自分がした一世一代の『演技』を思い返していた。

あんなの嘘。ぜんぶ嘘。自分が特別な何かで居られなくなつたから出て行きたいなんて、そんな子供みたいなこと私が言い出すわけないじゃありませんか。

でも……今年が終わるまでにナギの側を離れなさいいけないことだけは、本当。

おじいさまが始終気にかけている王族の庭城があと二ヶ月ほどで崩壊してしまうらしいことは、お屋敷に仕掛けてある盗聴……こほん、とある筋から聞きました。タイムリミットが間近に迫ってきた以上、王族の力を狙う人たちがまた良からぬ動きをし始めるでしょう。そしておそらく……ハヤテ君の前の執事で、ナギを絶望の一手手前まで落としかけて姿を消した、あの姫神君もきっと私たちの前に姿を現すことでしょう。

私はもう二度と、ナギにあんな思いをさせたくありません。なんにも知らずに友達と一緒にマンガを描いていられる、ようやく辿り着いたナギのちいさな幸せを守らなくてはなりません。

でも今度の姫神君は途中で手を緩めてはくれないでしょう。きっと戦いは熾烈を極めるでしょう……仕切り直

しの余裕を無くした今なら、彼はどんな手段だって使うでしょうから。ナギを守る……その一念だけで前回の戦いをくぐり抜けた私でしたけど、今回はその余裕もないかもしれません。

ですからそうなる前に、ナギとは距離を置こうと思います。私と姫神君が血だらけになって戦うところなんてあの子に見せたくない。あの子の身体だけじゃなく、あの子を取り巻く生活自体を守るのだと思えば、私はきっと一人でも頑張れると思うんです。

一年前までの私ならこんなこと想像もしなかったでしょうね。でも今なら大丈夫。私が居なくなつてもあの子は独りじゃないし、遺産がどうなるうともあの子はしっかりやっつけていける。それに万一私が敗れたとしても、ナギの側には頼もしい騎士（ナイト）さんがついていることとすし。

ハヤテ君、私は本当に、あなたに感謝しているんですよ……。



そんなマリアの思惑を知る由もないハヤテは、告白の衝撃冷めやらぬままフラフラと街を徘徊し……気がつく

とバイト先の喫茶店どんぐりで、バイト仲間相手にマリアの決意を口にしていた。普段は決して口の軽いわけはない彼がそんな挙に出ていること自体、衝撃の大きさを物語っていたと言えよう。

「マリアさんが居なくなるなんて、ちよつと想像できないなあ」

ハヤテとほぼ同じ感想を、少しだけ引いた視点から述べるのは西沢歩。マリアがナギにとってどんな存在だったかを彼女はハヤテほどは知らない。だが長くはないムラサキノヤカタでの同居生活だけでも、マリアの存在の大きさは身に染みていた。自分なんかには決して届きそうにない家事能力と気配りの理想型……それが居なくなるといのである。喪失感の大きさは想像に難くない。「確かに寂しいけど……本人がそう言うのなら、私たちも受け入れなきゃいけないわね。そう言われてみればマリアさん、高校卒業を迎えてもおかしくない年齢なんだし」

男らしく優等生的な意見を述べるのは桂ヒナギク。白皇学院の後輩としてマリアと交流のあった彼女は、マリアがそう簡単に翻意する性格でないこともよく知っていた。辞めることを事前にハヤテに告げたと言うことは、自分の代わりにナギを支えて欲しいと言うことなのだろ

う。ハヤテ自身に自覚はなくとも、ここに来てこんな話をすると言うことは同じことを私たちに期待しているに違いない……恋心以外では驚異的な洞察力を誇る白皇学院生徒会長は寂しい気持ちを棚上げし、ハヤテを元気づける方向に話を持って行こうとしていた。

「マリアさんは誤解してるんですよ。お嬢さまがマリアさん無しで、やっていけないわけないじゃありませんか。修学旅行の間お嬢さまが一人で眠れるようになったのは確かですけど、それってマリアさんが要らなくなったわけじゃないでしょう？」

「そんな理由で拗ねてるわけじゃないと思うけど……でもナギちゃんがどんどん成長してるのは私も見てて分かるもんね。親離れしていく子供を見つめる親みたいな気持ちなのかな？」

「で、でも……」

「知ったらナギは泣くでしょうね。行かないでと追いつたりもすると思うわ」

「ですよね！」

「……でも、いつかは乗り越えなきゃ行けないんだと思うの。一年前ならいざ知らず、今のナギにはそれができると思うし……ある意味これが、ナギにとっての卒業試験みたいなものかも知れないわね」

ともあれマリアが明日すぐ居なくなるわけじゃなし、ナギには内緒にするという約束もあることだし……あまり引きずらないようにと恋人未満の少女二人に励まされて、綾崎ハヤテは喫茶店から家路へと戻っていったのだった。

ところが。ハヤテが喫茶店を去って数分後、どんぐりを訪れた爆弾娘の発言が事態を一変させる。

「それは恋よ！ マリアさんはハヤテ君が好きなのに、ナギに譲るために身を引く決意をしたんだわ。まさか本当の理由を言うわけにも行かないから別の口実をつけて！ 同じ立場だった私にはその気持ちよく分かるもの！」

話を聞いた水蓮寺ルカの乙女らしい解釈に、西沢歩と桂ヒナギクはハッと顔を見合わせた。彼女らは友人であると同時に、綾崎ハヤテをめぐる恋のライバル同士でもある。これまでマリアはその枠外だと思ってきたのだが……言われてみれば、その可能性を考えない方がおかしい。

「そっかあ……そういえばハヤテ君って基本的に大人っぽい女の子がタイプなんだもんね。特に頼りがいがある

てキレーで優しい人にすぐメロメロになるって言うか……マリアさんってど真ん中ストライクな女性だし……」
「でしょ!? 思えば私とナギの同人誌勝負の時だって、ハヤテ君はナギを選んだと言うよりは『ナギの執事としての現在の生活』を守りたかった節があったもの！ その生活のなかにマリアさんが入っていてもおかしくないと思う！」

「そういえばナギちゃんたち三人でこの喫茶店に来たとき、ふと思つたことが何度かあったんだよね、『ハヤテ君ってもしかして、このメイドさんのこと好きなんじゃ……』って！ まさかとは思ってたんだけど」

「いやいや、ちよつと待つてよ」

恋バナで盛り上がりかけるルカと歩の会話に、冷静沈着なる生徒会長がブレーキをかける。

「ハヤテ君の方はそうかも知れないけど、マリアさんがハヤテ君を好きになるってあり得くない？ だってマリアさんって言ったら、美人で可愛くてスタイル抜群、文武両道で才色兼備、家事万能で働き者、そのうえ優しくて茶目っ気もあるスーパー完璧超人よ!? あんな人がハヤテ君を好きになるなんて、あり得ないにも程があると思う」

「それ、ヒナ（さん）にだけは言われたくない」

ルカ十歩からのダブル突っ込みを受けて、戦艦ヒナギク轟沈。

「そうなるときさっきの話、もっと別の解釈もあるんじゃないかな? 『ナギちゃんのメイドを辞める』って言っただけで、ハヤテ君の前から消えるとは言っていないし」

「ナギのメイドからハヤテ君の恋人に転職? キャー大胆、昼ドラも真っ青よ!」

「ナギちゃんに内緒って釘を刺したのもそのためかあ、納得」

顔を真っ赤にしたヒナギクが喫茶店のカウンターに沈み込む間も、恋する乙女二人の会話はフルスロットルで急加速していくのだった。



「おお千桜、お帰り。何かあったのか?」

「い、いや何でも。ちよっと友達から電話があつてさ」

「ふん」

ナギとマンガ談義をするため三千院家を訪れていた春風千桜は、曖昧な笑顔を浮かべながらナギの部屋のベッドに腰を下ろした。表面上は平静を装いながらも彼女の胸はバクバクと激しい鼓動を打っている。それはわずか

数分前、ナギとの話の最中に水蓮寺ルカからかかってきた電話のせいだった。

「ちよっと千桜、知ってる!? ハヤテ君とマリアさんが夜の公園で告白し合ったって!!」

ルカの話は細かい部分が省略されていて、ついさっきハヤテたちが情熱的な愛の告白を交わし合ったことになってた。それだけなら一笑に付すところだが、ヒナギクやハヤテ本人からこの話を聞いたというルカの言葉が恐るべき信憑性を与えていた。

普段こういう恋バナに疎い側の女の子だった千桜は、その真偽を確かめる話術など持っていなかった……しかし仮に持っていたとしても、今の千桜にそれを使う余裕などなかったに違いない。ナギが現在制作している実録風恋愛漫画をサポートする立場に居る千桜には!

「どうした千桜、顔色が悪いぞ?」

「……い、いや何でもないよ」

ナギの描いているマンガが、ナギ自身とハヤテの最初の出会いを題材にしていることは千桜も聞かされている。『僕は君が欲しいんだ』まるでラノベに出てくるような情熱的なラブシーンに秘かに憧れてもいたのだった……そのハヤテが今は別の女性と相思相愛になつてるなんて、シャレで済む話ではない。まして相手はナギの姉代わり

と言っているいい女性で、逆立ちしたってナギに勝ち目などないのだから！

「なあ、ナギ……その話、いま投稿するにはもったいなくないか？ もっと実績を積んでから、プロデビューするときに回したらどうだろう。お前のとっておきの話なんだろ？」

「とっておきだからこそ描くのさ！ 面白い実話を元にするのが一番面白いって足橋先生も言ってたしな。才能の出し惜しみをして頂点に立てるほど、私の挑む世界は甘くはない！」

「そうだけど！ お前の言うとおりなんだけど！」

ナギの成長に舌を巻きながらも、千桜はハラハラドキドキが止まらない。お前の勘違いかも知れない、既に終わったことかも知れない過去の幻影を、よりにもよってこのタイミングでマンガ化しなくたっていいじゃないか。真実を知ったらお前がどれだけ傷つくか。想像するだけで寒気がしてくるよ……。

その後、紅茶を入れに来てくれたマリアにお礼を言った千桜は、片付けを手伝うという下手な口実で強引にマリアを部屋の外に連れ出すと、壁ドンの体勢でマリアに

問いかけを始めた。とはいえ『綾崎君のことが好きなんですか』なんてストレートな質問ができるほど千桜は厚顔無恥なタイプではない。

「あの、つかぬ事を伺いますが……ナギのメイドを辞めるって、本当ですか？」

千桜の選んだ問いかけはルカの話のごく一部でしかなかったが、ナギの友人という立場で気にかける分には自然な内容と言えた。この時点でマリアが否定してくれば千桜としては安心できるのだが……返ってきた反応は違っていた。

「まあ、ハヤテ君だったら……口が軽いんだから、もう……」

「……………!!」

「今に不満があるわけではないんですよ？ でもナギも成長したし、この辺であの子とは別の道を歩いてみようかと思ってる」

「……………それって……………」

「千桜さん。これからもナギのこと、よろしくお願ひしますね」

「……………!!」

にっこり笑って厨房へと引き上げていくマリアの背中を呆然と眺めながら、春風千桜は口元を激しく振るわせ

ていた。

《……ガ、ガチだ、マジだ……ルカの言ってたとおりだ、確定だ……》

マリアはハヤテを連れてこのお屋敷を出て行く、残ったナギの面倒を千桜に見て欲しい……ルカの恋愛脳に侵されていた千桜には、マリアがそう言ったとしか解釈できなかつたのである。

千桜のもたらした情報は瞬時に拡散され、ハヤテを慕う女の子たちを絶望の淵へと叩き落とした。なんせ相手はあのマリアである。当人のスペックやハヤテとの距離もさることながら、『夜の公園で一人きりの告白』という恋愛の達人ばりの行動力が、ライバルたちの抵抗の意思を根こそぎ奪っていった。

ただわずかに希望があるとすれば、どんぐりでの会話を聞く限りハヤテはナギのことが気がかりで決断に踏み切れていない節があること。そして最大のキーパーソンである三千院ナギが、あの二人の交際を認めるとは到底思えないこと。つまりはナギの対応が鍵を握ると言うことである。

しかし、ナギに密告をして二人の仲を裂いてもらうと

いう提案は誰からも挙がらなかった。年下の友人であるナギが一番傷つくと分かっていたながらその選択肢を推すのは残酷と思えたし、そうなった途端にマリアとハヤテが手に手を取ってナギの元を出奔するという可能性も高いと思えたためだった。

ナギには何も知らせないまま、ナギのことを口実にしてハヤテを翻意させる。少女たちの出した最終的な結論はそれだった。様々な回り道を経てそのことをハヤテに伝えると……。

「僕はお嬢さまの元を離れる気なんてありませんよ？ お嬢さまは僕の命を救ってくれた恩人なんですからね。え、マリアさんが僕のことを好き？ そんなことあるわけないでしょう。想像もできませんってば、そんなの」
ハヤテの言葉の前半に少女たちは胸をなで下ろしたが、後半部分については全く信用していなかった。ハヤテが自分自身に向けられる好意について恐竜並みに鈍感であることを、少女たちは知り抜いていたから。



そしてまた、ハヤテとマリアは夜の負け犬公園で向かい合っていた。

「マリアさん……あの……」

「……なんでしょう」

ハヤテだって、マリアが『卒業』することに納得したわけではない。ただ『お嬢さまが寂しがるから』という理由ではマリアを翻意させられないために手をこまねいただけだった。少女たちのアドバイスを受けたハヤテは、何度も練習した言葉を口に乘せた。

「マリアさん、行かないでください！ 僕、マリアさんと一緒に居たいんです。僕のためにお嬢さまの側に残ってください。僕では……かすがいになれませんか？」

「……」

ストレートに『好きです』とは言わず、年下の同僚として『お願い』する方向からまずは攻めてみる。マリアが自分のことを好きなわけではないというハヤテの主張を入れつつ、少女たちの知恵を絞って慎重に練り上げた文章がこれだった。

少女たちにしてみれば、これに対する反応でマリアの真意が測れるはずだと考えていた。YESならマリアのハヤテLOVEは確定、NOなら逆に戦線離脱確定と言うことになる。例え前者でもこれならギリギリ『ハヤテから告白したこと』にはならないので、ハヤテとマリアが相思相愛になるまでの時間も稼げる。二人がナギの側

を離れない間なら何とかできるはず……半年以上に渡る自分たちからのアプローチが空振りばかりだったことは一時棚上げして、少女たちは真剣に二人の会話を見守っていたのだった。

ところがマリアの返答は、すべての関係者の予想を裏切るものだった。

「マリアさん……あの……」

「……なんでしょう」

もじもじと言葉を選ぼうとするハヤテとは対照的に、マリアは警戒のアンテナを全身に張り巡らせていた。一つ、二つ、三つ……明らかに複数の気配が、物陰から自分たちを注視しているのを感じる。特に殺意とかは感じないけれど、これが庭城絡みの手の者だとしたら……私たちはおびき出されたことになるのかしら。

「マリアさん、行かないでください！ 僕、マリアさんと一緒に居たいんです。僕のためにお嬢さまの側に残ってください。僕では……かすがいになれませんか？」

「……」

マリアはハヤテの言葉など碌に聞いていなかった。周囲から伝わる緊張感が一気に上がったのを感じて、これ

はハヤテが周囲の者たちに言わされている言葉であることを瞬時に察する。ハヤテ君が敵側に寝返ったとは思いたくないけど……でもびっくりするほど真面目で素直な子だから、言葉巧みに利用されることはあるかも知れない。そうだとしたら迂闊な答えは……。

……って、そんなこと考えてる場合!?

「ハヤテ君のバカッ!」

「……えっ?」

「そんなのどうでもいいから、早く帰りなさい、今すぐ!」

マリアはハヤテを追い払うと、自分も別のルートを使ってナギの元に駆けだした。自分とハヤテを外部の公園に呼び出し、殺すでも捕らえるでもなく監視だけしていると言うことは……きっとこれはナギの周りを手薄にするための陽動に違いない。長々と話している場合ではないのだ。取り返しのつかないことが起こる前に、一刻も早くナギの元に戻らないと!

そして二人が去った後の負け犬公園では。

「バカって言ってた……」

「言ってたわねえ……」

「浮ついた雰囲気ゼロだったよなあ……」

「そんなのどうでもいいって……あの二人の関係、いったい何なの……?」

物陰に隠れていたハヤテの友人たる少女たちが、一斉に頭を抱えていたのだった。

Fin.

夏といえ、というほどのことでもないけれど、ここ最近よくアイスコーヒーを飲むようになった。

ただのアイスコーヒーではない。ハヤテ君の特製である。ハヤテ君の作ってくれるアイスコーヒーが美味しくて、毎日のように飲んでしまう。

そう、彼の作ってくれるアイスコーヒーは、特別美味しい。——特別、美味しいのだ。

今日も客足のまばらな喫茶どんぐりのカウンターで、アイスコーヒーを飲みながらハヤテ君と談笑する。

ホットでもアイスでも売られる缶コーヒーが広く流通する今となってはピンと来ない人がいるかも知れないが、アイスコーヒーというものは、単に普通のコーヒーを冷ましただけでは作れない。

いや、それでも「アイスコーヒー」にはなるのだろうかけれど、ホットで淹れたときと比べて、風味が明らかに劣ってしまうのだ。

それを避けるためには氷のたくさん入ったグラスに注いで一気に冷やすのがいいとされているが、氷で薄まってしまいう分を計算して、あらかじめ濃い目に抽出する必要がある。

そういう手順を見越して、アイスコーヒー用の焙煎をした豆も流通している。

意外と手間がかかるのだ。ハヤテ君に説明してもらうまでは、私もよく知らなかった。

聞いたところでは、アイスコーヒーはそもそも日本以外ではあまり馴染みのない飲み物らしい。

古き良き日本の喫茶店文化の中では、大きな位置を占めた飲み物の一つであったらしく、夏場に「アイス」という注文があれば普通、アイスコーヒーを指すと言われていたほどだという。

それこそピンと来ない話だ。

「関西人でも、『冷コー』とか言うのはかなり年のいった世代だと、咲夜さんが言っていました」

「ある意味、死語よね」

「レモンスカッシュを『レスカ』とか言って注文するお客さんもたまにいらっしやいますけど、ほぼ年配の人だけですね」

喫茶店自体が減少傾向にある今となっては、よほどのこだわりがない限り、今説明したような手間をかけたアイスコーヒーを作ったりはしていない。

ここ喫茶どんぐりでも、普段は業務用のアイスコーヒーを仕入れて提供している。

いくらコーヒーが好きと言っても、真夏に熱いコーヒーを飲むほどではない私にとって、アイスコーヒーは夏場の飲み物の選択肢としては魅力的なのだが、いかんせんこの業務用アイスコーヒーというのが、私に言わせると全然美味しくない。

そんな愚痴をこぼしていたことを覚えていたのだろうか。あるとき、私がハヤテ君にアイスコーヒーを注文すると、彼が気を利かせて、手間をかけた方のアイスコーヒーを用意してくれた。

何も知らずにそれを口にした私は、初めてコーヒーを飲んだ人みたいな顔をして、しばしの間固まってしまった。今までに飲んだことのない味のコーヒーだ。

ふと顔を上げると、にっこりと笑うハヤテ君と目が合っ
て、そこで我に返ってから、改めて感嘆の声を漏らした。

『なにこれ、おいしい』

それ以来のことである。

私がハヤテ君に注文したときだけは、ハヤテ君特製のアイスコーヒーが出てくるようになった。

それが恒例になり始めた頃に、裏メニューみたいなものかな、と何の気なしに言ってみると、ハヤテ君はこう答えた。

「まあ、まかないというか、従業員割引というか、そんな感じですかね」

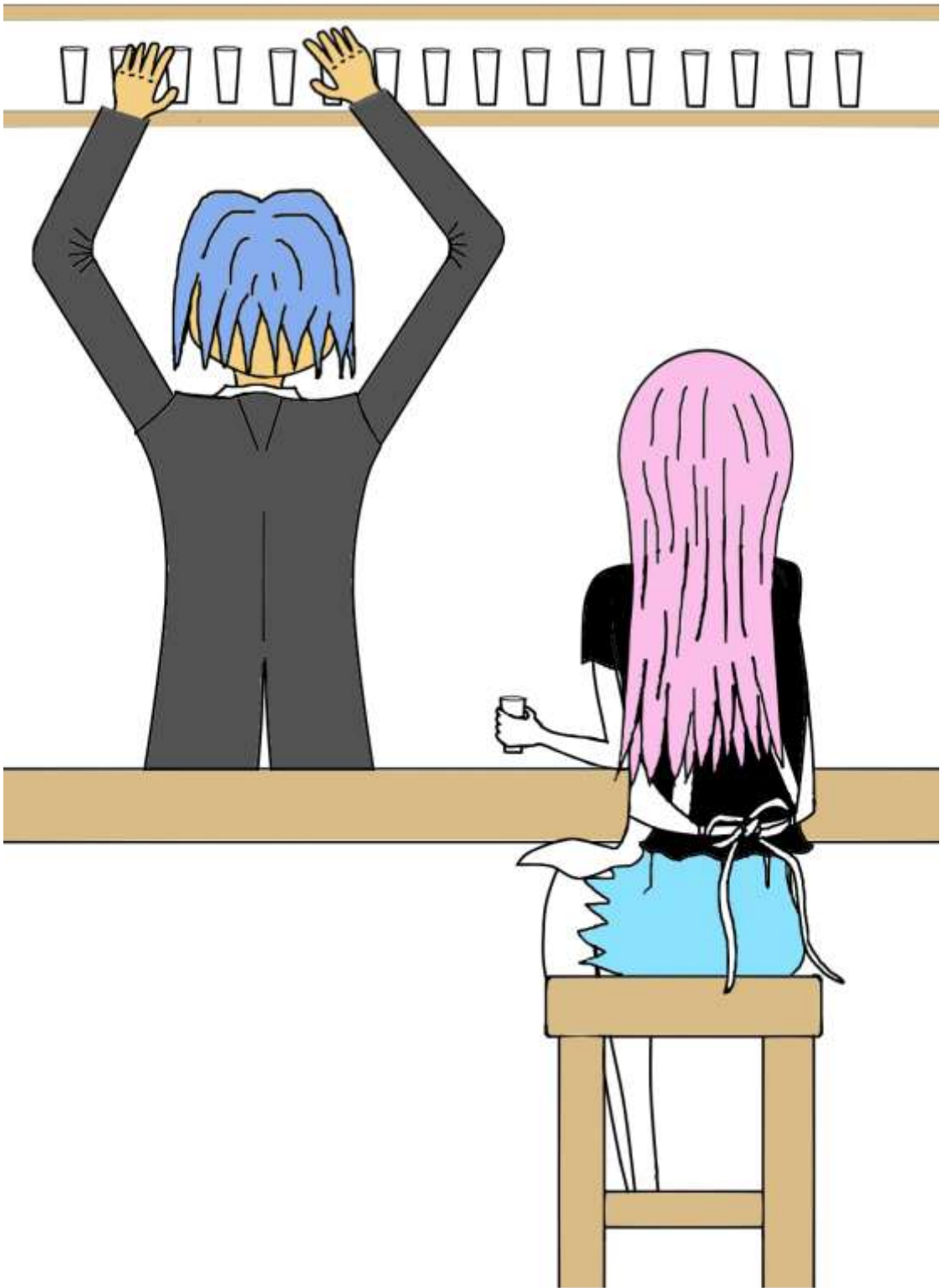
「同じ値段でお客さんに出すよりも上等な商品を飲むっていうのもどうかしら」

「業務用アイスコーヒーを割引で出すよりも、従業員の福利にかなっていると思いますよ」

「ふふ……そうね。まあ悪い気はしないわ」

悪い気はしないどころか、本当は飛び上がりたくなるほど嬉しいのだけれど、それを表に出さないように抑えながら、私は今日もハヤテ君の作るアイスコーヒーを口にする。

そう、これは特別。ハヤテ君から私への、特別なのだ。



だから、あなたと居るときにはいつも、アイスコーヒーが飲みたくなる。

アパートに居るときでも、私がアイスコーヒーを頼むと、ハヤテ君は特別美味しい一杯を用意してくれる。

とくべつ——

いつだって、あなたの特別であり続けたい。

アイスコーヒーを口に含むたびに、融けた氷がカランと音を立てるたびに、水滴で覆われたグラスを触れるたびに思う。

これから私が飲むアイスコーヒーが全部、特別美味しければいいのに、なんて。

テーブル席に座った中年女性の二人連れに、フレンチトーストを運ぶ彼の背中を目で追いかけているが、そんなことまで考える。

ああ、そうだ。

この間は、これに近いことを言って、よく分からない勘違いと後悔に見舞われたんだっけ。

相変わらず、恋が絡むとまるで自分が自分でなくなってしまうたかのようになる。

思ったことが、適切なことが言えなくなってしまう。

ある意味で彼の鈍感に助けられているところはあるのだろうけれど、それにしても一体、いつまでこうしているつもりなのだろう。

「このアイスコーヒーだったら、何杯でも飲みそうな気がするのよね」

「ダメですよ。カフェインは体を冷やしちやいますからね。飲み過ぎはよくないので、一日一杯までにしましょうね」

これから飲むアイスコーヒーが全部美味しければいいのに——

難しいことではない。ハヤテ君の作るもの以外のアイスコーヒーを飲まなければいいのだ。

——そんなこと、無理じゃないかって？

じゃあ、ハヤテ君のそばにずっと居ると、どちらが難しいかしら？

そんな、答えない問いを何処へともなく投げて、お茶を濁してばかりだ。

いや、これはコーヒーなのだったか。

茶色く澄んだ液体と氷で満たされたグラスを覗き込みながら、顔を上げずにつぶやく。

「ちえ。こんなに好きだって言ってるのにな」

こんなに、好きだと。

あなたの作るアイスコーヒーが好きだ。

つまり、アイスコーヒーが好きだ。いや——

いやいや、違う違う。もちろんそうだけど、そうではないくて。

つまるところ、私が好きなのは——

「……分かってますよ」

……いいえ、あなたは、分かっていないわ。

頭の上に降ってきたハヤテ君の答えを受け止めながら、

言えない言葉を飲み込む。

言いたくても言えないままでいる私は、いつまでこのままなのだろう。

でも、言わなくても分かって欲しい、なんて都合のいいことを思ってしまうから。

だから私はいつまでも、あなたとの距離を変えられない。

「言ってくれば毎日でも、一日一杯までは用意します

から」

「……冬になってもアイスコーヒーが飲みたいって言うかしら」

——冬になっても、あなたとの距離は縮まらないままだろうか。

私がそう言えば、コーヒーを作ってくれるような。

私がそう言えば、毎日、私に特別を用意してくれるだろうか。

私がそう言えば——

——私はあなたの特別でいられるだろうか。

「もちろん、アイスコーヒー以外でも用意しますよ」

「……そんなことを、今まで何人の女の子に言ってきたの？」

「いやだなあ、ヒナギクさんってば」

ニコニコと笑うハヤテ君は、そう答えただけでこの話を切り上げてしまう。

何だか、どうしてもうまくかわされてしまうように感じるのは、気のせいなのだろうか。

恋愛が絡むと信じられない鈍感を発揮する、と勝手に思

っていたけれど、最近はどうも、その評価にも違和感を覚えるようになってきた。

いや、恋の駆け引き、なんて器用な真似ができないことが明らかである私には、そんな違和感を自分の振る舞いに反映させることもままならないのだけれど。つかみどころのない人だ。

それでも、離れられないままでいる。いつの間に、こんなに深みにはまってしまっていたのだろう。

グラスに目をやると、残り少なくなったコーヒーが、融けた氷で薄まっていた。

ハヤテ君に「一日一杯まで」と釘を刺されてしまったのは仕方がない。

「さて、と」

名残惜しい気持ちと一緒にそれを飲み干してしまっただけから、私は席を立った。

こんなバカバカしい歌を信じてくれるのは、そうキミだけさ。

変わり者のキミだけ。

どうしてボクこと嫌いにならないのか、ずっと不思議だよ。

ただ一人の理解者。

酒の味を知らなかった16歳の俺は、特になんの変哲も無いオタクだったと思う。

なんとなく学校に通って、なんとなく勉強して、アニメとプラモにだけは情熱を注いで、女子からは見向きもされない話に熱を上げていた。

幼馴染の可愛い女の子のことを目で追いながら、何かしらアクションを起こすでもなく。ヘタレな自分に対する自己嫌悪に悩まされて、時間だけを浪費していた。

18歳の時、状況はちよっと変わった。

俺にとってはちよっとでも、そいつにとっては大問題だ。

俺がいつも目で追っていた女の子の両親が、借金を苦に失踪したのだという。

驚くべきか、ある意味期待通りというべきか、そいつはへこたれた様子をまったく見せなかった。だから、どうしようも無い俺がそのことを知ったのは、本人から聞いたわけでも、様子から察することができたわけでもなく、母の口をついた話題からだった。

失踪のタイミングが長女の卒業直前、というのは、せめてもの配慮だったのかもしれないし、どうしようもなくなるまで動けずいたからなのかもしれない。

かくして雪路とヒナギクは、一時期路上をさまようほど追い込まれた。

少なくとも、その時点で俺にできることは何もなかった。強いて言えば、せいぜいが焼き芋をおごったくらいのことである。

酒の美味さがまだわからない20歳の今、俺は相も変わらず人生に迷っている。

1年の浪人を経て大学に入り、相も変わらずアニメを

見て漫画を読んでプラモを作っている。将来何をしたいのかは未だにはっきりしていなくて、せめて大学くらいは出ておくべきだ。と思ってキャンパスライフを手にしたものの、やはり時間を見つけては1人で趣味に没頭してしまうのは、やはり性根がそうそう変わるものではないという証拠であるのか。それとも怠惰の象徴か。

とはいえ、さすがに今は趣味に没頭するわけにもいかない。

一人暮らしのために借りた狭いアパートの一室では、漫画雑誌やプラモに囲まれて、1人の女がファンヒーターで暖を取っている。ポニーテールにまとめられた色素の薄い髪、大きな目、整った顔立ち。パンツルックとはいえだらしなく胡座をかいて、寒そうに体を丸めて缶コーヒーをすすっている。

俺がやったら貧乏くさい苦学生にでも見えるのだろうか、こいつはそんな姿勢でも、なぜか様になっている。美人は得だ。

「家主にお土産はないのか？ 雪路」

「あると思ってるの？」

「いいや、期待はしてないよ」

桂雪路は、最近ちよくちよく俺の部屋にやってくる。漫画を読んでゲラゲラ笑っていたかと思えば、エレキギ

ターをじやかじやか弾き鳴らして感想を求めてきたり、コンビニ弁当を差し入れに持ってきて2人で食べたり、まあ暇つぶしのためである。

最初は単なる気まぐれかと思っていたが、そんな状況が半年ほど続き、ようやく俺にも理由がわかるようになってきた。

こいつが俺のところに来るときは、らしくもなく凹んでいる時だけなのだ。

雪路はいつも、自分の居場所を見失ったように、空っぽの笑顔を浮かべていた。

エネルギーの塊みたいだった学生時代とは、表情がまったく違うのだ。最初はこいつも大人になりつつあるのかと、情けない疎外感を覚えていたものだったが……、どうも俺は自分のことしか見えていなかったらしい。

片思いすら半人前とは、我ながら情けないものである。暖房を独占されているものだから、冬の寒さに背筋が冷えていくのを感じる。外よりはマシだろうが、部屋全体を暖めるにはパワーが足りないのだ。

「ちよつと俺にも場所あけてくれよ。寒くなってきた」

「えー」

不満そうな声をあげながら、雪路は少し横に移動する。本当に少しだ。くつつかないと温風に当たれないのだが、

いいのか……？ 本当によいのか……？ おい？

にわかには活発化した心臓の鼓動が聞こえたわけでもないだろうが、雪路はもう少しだけ場所を空けてくれた。

残念、ではなく、ホッとしている自分に気づいて、ヘタレた性根にため息が出そうだった。

「ラーメンでも食べに行かないか？」

雪路はこちらを見もせずと言った。

「奢りならいいわよ」

いいぞ、と言葉を返した。

それで元気が出るなら、安いものである。

「で、今日は何があったんだよ」

「いたいけな女子のプライベート詮索するつもり？ やらしーわね、あんたも」

「いたいけな女子ってのは、奢りなのをいいことに、ラーメンのトッピング制覇するような人間のことを言うのか？」

ラーメン屋から出た俺たちは、今にも雪が降りそうな空を見ながら、ロマンチックとは程遠い会話を交わしている。

今がチャンスなんじゃないか。

この半年間、何回そんなことを思ったか、もう覚えていない。

しかし桂雪路は、俺の鈍い観察眼から見れば、いたいけではなくとも傷心した女子なのは間違いない。そして、そんな彼女に長年抱え込んでいた思いを打ち明けてしまうことは、弱り目につけ込むことに他ならないのではないか。

俺の軟弱な悩みをよそに、雪路はきらびやかなイルミネーションを、手の届かない夢の中を覗き見るように眺めている。

その様子が、俺の勘違いによるものでなければ、こいつの悩みの種は間近に迫ったクリスマスなのだろうか。

「……なあ」

「義母さんがさ」

同時に声をあげ、2人で顔を見合わせる。

「気まずいな……」

この前読んだラブコメでは、この直後に2人して顔を見合わせて、どちらからともなく笑いあっていたものだったが、やはりあれはフィクションの産物か。

「どうぞ」

「ああ、うん。それじゃあ」

咳払いを一つ。雪路は前に向き直って話し始めた。

「義母さんがね、最近すつごく明るい。雪路ちゃん、クリスマスはどうするの？もし急に友達のところ泊まる用事ができたら、真っ先に私に言っただけ？お義父さんにもヒナちゃんにも、うまく言い訳しておくから。」

「地獄だな。期待してるのがわかる分辛い」

「よねえ。そんな相手がいいたら、クリスマスにケーキのリクエストなんてしないっての」

「お前、新しい家族との生活めちやくちや楽しんでるじやねえか」

「何？居場所がないと思ってたの？」

「じやなきや、わざわざ俺のところに来ないだろうって思ってたよ。いや、でも安心した。俺がそんなこと心配すんのも、おこがましいかもしれないけどさ。時々思ってたんだよ。困ってるなら、何かできることはないかって」

なるべくにこやかに、朗らかに、からかいの種になるくらい親しみやすく、そんな話し方を心がけた。恥ずかしい本音が口をつけて出てしまう時、俺は半ば無意識のうちに、そんな口調を選択してしまう。

が、このときばかりは失敗した。

いつの間にか、隣を歩いていたはずの雪路は遙か後方

にあった。

綺麗な顔をしているのに、このときばかりは面影もない。怒りと屈辱に支配された、憤怒の形相がそこにあった。

「……憐れみのつもり？」

決壊寸前のダムを見ているようだった。

違う、という俺の言葉が届くことは、恐らくないだろう。

そういえば、ああいう話をしたことはなかったな。と、散々罵倒された翌日になって気づいた。

避けてきた、というよりも「触れる度胸がなかった」という方が正しいのだが、この結末から言えば、それはベターな選択だったと言えるだろう。いや、それにしてもこの地雷をいつまでも踏まずにいられたかというところ、正直自信はない。未だに俺は、あいつがあそこまで怒った理由を把握できていないのだ。

心配くらいするだろう、そりゃ。

こちとら血の繋がってる両親とすら、うまくいかないことだらけなんだ。問題の一つや二つ抱えて、それでなくとも遠慮して摩り切れそうになることだって、あって

当然だと思っだろう。

それを憐れみだと思われたら、俺があいつにできることなんて一つもなくなってしまう。

「そもそも、あいつが怒るポイントなんて、考えてもわからないことだらけだな……」

部屋に満ちた冷たい空気に、むなしい独り言が溶けていく。

一緒にいられれば、それで良かったんだけどな。

クリスマスを一緒に過ごせたら、なんてことを、一度も考えたことがないといえれば嘘になる。だけど、俺の退屈な日常を壊してくれるあいつのエネルギーを、間近で感じる事ができたなら、それだけで何かが変わる気がするのだ。気まぐれにそばに寄ってくるだけでも、嬉しい気持ちになるんだ。

だけど、その機会はもう失われてしまったかもしれない。きっと、俺がバカだったせいで。

ダメだな。どんどん気分が落ち込んでくる。

結局その日はプラモを作って寝た。

呆れたことに、その日はとても卑猥な夢を見た。

「京ノ介。いる？」

玄関からそんな声が聞こえてきたのは、俺が出来る限り世間から距離を置こうと無駄な努力をしていた、クリスマスイブの夕方の頃であった。レポートという名の俗世からのしがらみを放り出し、ひたすら落ちものゲーをやって雑念を葬ろうとしていたものだから、その声が雪路のものだと気づくのに30秒ほどの時間を要した。

「い、いるゾ」

「なにその声」

声の出し方を忘れていたらしい。裏返って自分でも驚くほど気持ち悪い返事になってしまった。

「ちよ、ちよっと待ってる。今開ける」

最近まったく来客がなかったのも、今の部屋は人に見せられる状況ではない。急いで半纏を羽織って、玄関に出る。

雪路は少しだけ化粧をしていた。服もいつものラフとすべきかだらしないというべきか判断に迷うような代物ではなく、足元はストッキングとタイトなスカート、上半身も黒を基調に上品にまとまっていて（どう言えばいいのか、俺の知識には語彙が見当たらない）、厚手のコートを乱暴に肩にかけているのと、無骨なギターケースを提げているのが、少しばかり粗野に映るものの、なんというべきか、とても似合っている。

「……酷い顔してるわよ」

「えっ」

「ヒゲ伸びてるし、髪もボサボサ。外歩いたら警官が飛んできて職質されるわ」

「久々に顔を合わせたと思ったら、随分失礼な言い草だ。とはいえ全て事実である。いつになく着飾ったこいつから見れば、俺は浮浪者と間違えられかねない風貌であるに違いない。」

「最近来客がなくなっつてな。身だしなみの整え方なんて忘れたよ」

「そんなんだから、聖夜に暇してるんでしょ」

「お前の方こそ、どうしたんだよその格好。急ピッチで恋人こしらえたのか？」

「あれーそんなこと言っちゃうんだ？ せっかくこんな美少女がお誘いに來たつていうのに、チャンスをついにしちやつていいのかなー」

「下から覗き込むような仕草と、その言葉に、不覚にも心臓が跳ねた。」

「……まだ、怒ってるのかと思ったよ」

「いつの話してるのよ。というか、あたしはむしろそれを謝ろうと思ってきたのよ」

「謝る？ お前が？」

「うん、でも頭下げるのは癩だから、今日は奢ってあげる♪」

「癩だからときたか。」

「露骨に愛想良くされても、嬉しいといえれば嬉しいのだが、どうも違和感がある。」

「いや、それは俺がここ最近、沈んだこいつしか見ていないからだろう。」

「雪路はもともとこういう奴で、俺の前で見せていた顔の方が、むしろ例外なのだ。前言撤回。やっぱり純粹に嬉しい。」

「んじゃちよっと待っててくれ。身だしなみの整え方を思い出すから」

「それより先に、シャワー浴びてきたら？」

「……その言い方は、ちよっとずるくないか？」

「なかなかいい感じじゃない？ 久々に來たけど、変わらないもんねー」

「狭苦しい部屋だった。タバコと汗の匂いが壁に染み込んでいて、二人だけでも圧迫感を感じるくらい小さい。見覚えのあるギターはアンプにつながれ、雪路は指を慣らすと言って、さっきから有名なフレーズを引き続けて

いる。

間違ってもカップルには見えまい。という理由で、デイナー（笑）は牛丼だった。間違はなくカップルと思わしき客が何組かいたものの、気にしていても仕方ない。

そして、食事の後に連れてこられたのは、昔馴染みだという古びたスタジオだった。以前はバンド仲間を募って練習していたらしいが、長続きはしなかったらしい。まあ、こんな狭いところで爆音で楽器を弾き続けられ、ストレスも溜まるだろう。

「ねえ、京ノ介」

「ん？」

「あたしは、これでも最近結構真面目にやろうと頑張ってきたわけよ。でも、父さんたちがあんなことになっちゃってさ。今の義父さんに色々無理言って、助けてもらうことになって、そりやあたしは今まで自由に、好き放題やってきたわけだから、人と合わないこともたくさんあって、当たり前だけど義父さんや義母さんとも意見が合わないことがあるわけよ。どっちが正しいかって言えば向こうが正しいんだし、それを押し付けるようなことはほとんど言わない人たちだけど、それでも、今まで生きてきた上での常識とか、習慣みたいな面でき。……あたしの言いたいこと、わかる？」

「わかるよ」

一言だけでは、安心させてやれないだろうか。だけど俺に言えるのはそれだけだ。タバコの匂い、汗の匂い、どこから漏れ聞こえてくるモテないバンドマンの叫び、気が散る要素なんていくらでもあるこの環境で、余計なことを言っても逆効果な気がするのだ。

雪路はチューニングをいじりながら、下を向いたまま話す。

「だけどさ。あたしは返そうにもすぐには返せない恩を受けてるわけでき。不愉快な気分にはさせたくないし、させるわけにはいかないって思っちゃうのよ。産んでくれた母さんには、そんな殊勝なこと思ってたのに、変な話よね。ヒナは本当にいい子だし、あたしたちに心配かけたくないって気持ち強いのか、すぐ真面目に頑張ってる。だけどあたしはどうも、いい子として生きて行くにはひねくれすぎちゃったみたい。

反感も持つし、適当に考えちゃうし、気も利かない。夢ばっか見てるわけにもいかないのはわかってるのに、後悔しそうで諦めきれない。今はなんとなくバイトしてるだけで、それでも義母さんは、将来のことをゆっくり考えればいいって、優しく言ってくれる。でも見つかる気がしない。

わかるんだよ。ちゃんと期待されてるんだって。だからキツイ。嬉しいけど、応えられなかったらどうしよう、って」

よくある悩みさ。モラトリアムってやつだ。時間が解決してくれる。

そんなことを、言えるわけもない。俺だってそんな風になかったような口を聞かれたら、怒りを覚えるだろう。もしかしたらぶん殴ってしまうかもしれない。

「なーんかさ。居場所がないって感じ？ いつもじゃないけど、どうしようもなく不安になることがあってさ。そういうとき、あんたのところに転がり込んでダラダラしてるとき、ちょっと落ち着くのよ。いつまでたっても代わり映えしなくて、あんたの周りだけは、外よりも時間がゆっくり流れてるといっか。バカにしてるわけじゃないわよ？」

おもわず笑ってしまった。

「まあ、褒め言葉じゃないよな。いいじゃないか雪路、もつと悩んだらいいし、めんどくさくなったら、今まで通り俺んとこに避難したらいい。もし何も答えが見つからなくても、目の前にいるダメ人間が、もしかしたらいい考えを見つかるかもしれないぞ」

「え、何？ あんたそんなダメなの？」

「慰めてんだよ引くな」

しかし、部屋に引きこもって延々とゲームに興じていたのは、いかにもダメ人間らしい行動なので、否定もできなかつた。

「あ、そうか。ダメ人間から同情されたから、あんなにイライラしてたんだ。目から鱗だわ。まさかこんなことで、自分の怒りに説明がつくとはね」

この女……。

「まあもういいだろ、こういうシリアスな話は。こんなところに連れてきてまで相談したかったわけじゃないんだろ？」

「ん、そうね。本題は」

アンプに増幅された小気味いいギターの音が、俺の体を爆撃した。こういう場所で聞くと、腹の底から脳天に至るまで、余すことなく音に揺さぶられる。

「桂雪路！ クリスマスソロライブ開催！ なんでもリクエストしちゃっていいわよ！！ 日付変わるまで歌い続けるからねー！」

懐かしいエネルギーだ。

太陽を飲み込んだような強烈なパワーと、一緒にいるだけで元気になる、桂雪路の人間の魅力。

とりあえず、イエー！ と叫んでみた。

存外、気持ちの良いものだった。

酒の美味さが少しだけわかり始めた28歳の俺は、思い切って昔のことを聞いてみることにした。

「なあ、20歳の頃に2人で飲んだことあったよな？」

「そんな前のこと覚えてないわねー」

「ああ、俺もさつき思い出したとこだ。音楽スタジオでおまえのギター聞いて、歌って、お前の実家の離れで、酒盛り始めたんだよ。そのあたりまでは臆げながら記憶があるんだが、それ以外はさっぱり。確かクリスマスだったと思うんだが」

だらしなく机に肘をついて「歳じゃないのー？」なんて空返事をしていたが、雪路はふと、額にペンを当てて考え始めた。

「あー、思い出した。あたし、その時初めてお酒飲んだのよ。次の日ひどい二日酔いで、一日中唸ってたわ。他に思い出したことある？」

「……目が覚めたら何故か外で寝てて、桂……いや、ヒナギクに起こされた。寒くて仕方なかったけど、それ以上には頭が痛くて……。あー、桂は俺を社会のゴミを見る目で見てたな……。思い出して凹んできた」

「あたしも思い出した。ヒナと義母さんから、こっぴどく叱られたのよね。近所の迷惑も考えろって……」

「……あ」

「どうした？」

「覚えてない？ あんたがあたしにセクハラしまくったの」

「は？ セクハラ？」

「お互いでもかくなかったもんだよなー、って言いながらあたしの胸触ってた」

「嘘だろ？ いやそんなことするはずが」

「ホントホント、というわけで8年越しに慰謝料もらうわね。今日はお酒奢って。ちよつと高いのがいいな」

「い、いや、認めないぞ！ そんな記憶は一切ない！ 証拠不十分で不起訴だ！」

「あんたこの国で痴漢の疑いかけられて、無罪が通ると思ってるの？」

「畜生！ 日本の司法制度は間違ってる！」

「それに、言いふらされたら困るのはどっちかなー？ ほらほら早く決断しないと叫ぶわよ」

「ああ、クソ。やぶ蛇だった……」

まったく、なんでこんな奴のことが、まだ諦められないんだ。

「明日になったら、ご近所さんに謝りに行かなくっちゃね」

水とおつまみの準備をしながら、お義母さんはそんな甘いことを言っていた。

「ダメだってば、お義母さん。ちゃんとお姉ちゃんに行かせないと。また同じことやるに決まってるわ。というか、そもそもなんで今のうちに止めないの？」

「酔っ払いには逆効果になるの。ヒナちゃんもいつかわかる日がくるわ」

「じゃあ、そもそも飲んだ時点で間違いなだね」

正論だと思ったのだけれど、お義母さんはちよつと笑った。

「そうね。だけど、雪路ちゃんが友達を連れてくるなんて初めてだから、大目にみてあげたいの。それとも、あの人は彼氏なのかしら？」

「恋人、ね。そんな感じじゃないと思うけどなあ」

薫さんはお姉ちゃんの幼馴染で、一応顔も名前も知っている。けどどちらかと言うと、家来というか、弱味

を握られた下僕というか、なんにせよ好き合っているようには見えなかった。私自身、その手のものを見抜く力に自信はないから、もしかしたら違うかもしれないけれど。

「何にせよ、ちよつとうるさすぎるんじゃないかしら。さっきから歌まで歌い出して」

「でも2人とも声が枯れてるみたいねえ。のど飴も持って行ってあげようかしら」

だからお義母さんは甘いんだってば……。

窓の外からは、調子の外れた歌声が聞こえてくる。

普段のお姉ちゃんとは全然違う下手な歌だけれど、歌詞はなんだかロマンチックで、それに合わせる薫さんも、いつもの大人しい人柄からは想像がつかないくらい楽しそう。

もしかしたら、本当に恋人なのかもしれないな、と。

私はクリスマスイブの聖夜らしいことを考えた。

「こーんなーバカアバカシューターをしんじーてーくれるのはー」

「そーうーキミーだけーきー」

「かわーりーもーのーのキミーだけ」

「どーしてーボクーのことー」

「きーらーいーにーなーらーなーいのか」

「ずーつとーふしーぎだよー」

「ただあひーとりーのーりーかーいーしやー」

どっちもあまりに下手くそで、2人してゲラゲラ笑い転げた。

お酒がこんなに美味しいものとは知らなかった。

気分がフワフワして、恥ずかしい歌でも平気で歌える。初めて飲んだお酒がこんなに楽しいのは、幸せなことなんだぞ。とあいつは説教じみたことを言うけれど、今は別に腹も立たない。

むしろお礼を言いたいけれど、素直に言うのも何だか癪で。

だから歌に乗せて、気持ちを伝えられたらと、そんなことを思う。

「ありがとう、キミが好きだよ」

超言理論〜Suerspring theory〜

著者：ピーすけ

下駄箱からガラス戸を一枚隔てた向こうは、薄く雪が積もっていて、だからすっかり日も暮れたというのにぼんやりと明るかった。

泉は、へとへと疲れた体の重さを依りかからせるようにして、ガラス戸をノロノロと押し開ける。

びゅう、と鋭い音を立てて、隙間から冷たい風が吹き込む。泉は思わず目を閉じてしまった。寒いどころか、痛い。まるで、風に体を真っ二つにされたみたいだ。ひりひりとする唇を舐める。さなきだに冷たさだけで充分だというのに、舌の先に広がる鉄の味からはなおのこと、鋭い刃を連想してしまう。

『冬なんて来なければいいのに』と悪態が口から漏れそうになるのを泉は辛うじて堪える。ネガティブは、言葉にすればするほど、みじめさが増すだけ。どうせ口にするなら、なるだけ幸せになれる優しい言葉の方が良い。というのが泉の信条だ。

「すごおい……まっしろだあ」

さも感嘆したかのように、泉は嘯いてみる。

自分の声は、思っていたよりもずっと演技臭さがなかった。そろそろと、滑らせないようにして足を踏み出す。ぎゅむ、と雪が踏みつぶされる音すら、少し面白く感じられた。

「泉さん？」

横から声を掛けられて、泉はどきりと肩を震わせる。

声の方には地面よりずっと夜の色をした執事服を、木の枝やら蜘蛛の巣やらで、ぐでんぐでんに汚した男の子がいた。

「ひやつ、ひやヤ太くん!」

泉は思わず声が裏返らせてしまう。びっくりしたのはひやや太……もといハヤ太くん……こと綾崎ハヤテの恰好がどっからどう見ても不審者のそれだったのもモチロンなのだけれど、それよりもちよつと気になる男の子とたまたま会えたという偶然に対してだ。

「どうされたのですか。こんな遅くに」

「ハヤ太くんこそどうして……ってというか、そんな恰好で大丈夫なの……?」

ぐちゃぐちゃに濡れているのに、ハヤテはいつも通りの笑顔だ。こんなんだから、ガ○ダムなんて言われてしまふのだと泉は思う。

「いくら君でも流石に死んじやうよ……それ……」

「平気ですよ。慣れていきますから」

あつけらかんと言いつ切るハヤテに、泉はちよつとしゅんとしてしまう。

ハヤテは、いつだって優しい。意図せずハヤテが持ち前の不幸に周囲を巻きこんでしまうことはあつても、進んで誰かに分けてくれはしない。泉はその強さに惹かれているのだし、文句を言うのは筋違いだと解っている。

だからきつと、泉がハヤテに掛ける言葉は、どんなに優しいつもりでも我儘になつてしまう。『貴方の不幸を分けて欲しい』なんて、そんな言葉は、力が強すぎる。惹かれあう力（もつとも、片想いなものだからこの表現は願望的な意味合いも含んでいる）は、本来もう少し弱くてしかるべきだろう。

でも。

「あのね」

泉は、空を仰ぎ見る。

雲の晴れ間からは、背伸びしたくらいではとても届かない場所に浮かんでいる星が覗いている。でも、手を伸ばさなければ近づくことも出来ない。

——すう

泉は、深々と冷たい空気を肺一杯に満たした。鼻から

まで息を吸ったせいで、痛みには涙が出そうになる。ハヤテの耐えている寒さと近いものであることを祈る。

「……不幸に慣れるのって、あんまりよくないことだと思う。強がるのはハヤ太くんらしいし、ハヤ太くんは実際に強いけどさ、もう少し素直に話してくれた方が、私は嬉しい。

たまにね、虎鉄くんのことが羨ましくなる時があるんだ」
望んでそう言った訳ではないだろうが、瀬川虎鉄はしかしハヤテに嫌われることで本音を訊きだせている。

「虎鉄くんと話してる時のハヤ太くんは、だっていつもより正直な気がするから」

「それは、あいつが変態だからそうしないとイケないだけで」

「私にも、あれくらいしてくれていいんだよ。だって、私はハヤ太くんの……友達だから。ちよつとくらいカッコ悪い君を知つたつて、嫌いになんてならない。

虎鉄くんが散々殴られてもハヤ太くんのことを好きなのと同じようにね」

「いちいちあの変態の名前を出すのはやめてくれませんかね……できれば、アイツのことは考えたくないです……」

「にはは。ゴメンゴメン」

寒くて仕方がない筈なのに、泉は手袋の中に汗を掻いていた。

「ね、ハヤ太くん。ちよつと、良い？」

泉は、ハヤテの手をとる。

手袋越しでも、ハヤテの掌は冷たい。きつと、泉の熱さがバレているとおもけれど、できれば寒さのそれはせいでと誤解してほしい。

「瀬川さん……？」

「……あ……え、つと……」

泉は自分でもびっくりするくらい、言葉が浮かんでこなかった。頭の中が真っ白で、目を合わせることも出来ない。

「こつち」

ぐつ、と泉は手を引く。

「お願い。こつち、来て。いいから」

語尾を強く区切る。

感情に振り回されているのを自覚する。

来てという言葉。願いを口にする、心も動く。

「わかりました。ですから、手を離してください」

——さい。とハヤテが言い終わるより先に、泉はハヤテの手を引っ張っていく。目指すは時計塔。つまりは白皇学院生徒会室。あそこなら温まれる設備もあるし、服を

乾かせられる。少し遠いけれど、家に帰るよりはマシだし、なによりその遠さすらも、今が過ぎる早さに比べれば名残惜しい。泉は、早鐘を打つ鼓動の数を数えながら、実感する——相対性理論は、こんなにも身近なのだ。



マッチを擦る音。懐かしさを感じる、安っぽいツンとした臭い。マッチの火を泉が吹き消すと、マッチから白い煙がほわり、と立ち上った。

ボツ、とストーブに火がついて、じんわりと熱が広がっていく。

泉はストーブの前に腰を下ろして、手を擦り合わせながら、ずび、と鼻を啜った。エアコンも点けているけれど、十分に温まるまではこれで暖を取ればいい。

「はい。ここに座って」

「……意外と、手際が良いんですね」

「えへん。このくらい朝飯前なのだ」

実はこの石油ストーブ、美希が個人的に持ち込んだ（持ち込ませた）私物なのである。だから本来の目的は、暖

を取ることではない。それは学校やヒナギクへの建前であり、つまり主だった使用用途は間食用の調理器具なのである。けれど、餅を焼くために覚えましてと言うのはいかにも格好悪いので黙っておくことにする。

「ありがたいございます。なんというか、本当にどうお詫びしたらいいか」

「いいの。ハヤ太くんはクラスメイトで、わたしはいいんちよさんなんだから」

「それってここまでしていただく理由になるんですか」

「深く考えないの。人を助けるのに必要な理由なんて、ちよっとしたことでも十分なんだから。ほら、情けは人のためならずって言うしね」

ハヤテは目を皿にして頷いた。

「まさか、誤用されやすい日本語を泉さんの口から正しく聞く日が来るとは……」

「あーっ、ひっどーい。私のことアホの子みたいに思ってるでしょ。それは、ちよっと抜けてるところもあるとは自覚してるけどさ」

「あはは……」

「もう……いいから、早くこっち来て。折角火まで焚いたのに、身体を冷やすつもりなの？」

泉は頬を膨らませた。ハヤテは、まるでストーブの前

に焼けた餅が二つあるようだと思った。

ハヤテは、汚れ落ちたジャケットを脱いで、泉の隣に座る。触れそうで触れない距離。

泉は隣に在る人の質量を強く意識する。視線が、そちらへと引き寄せられる。

明るい場所で見ると、より一層ハヤテはみすばらしい有様だった。

ジャケットを羽織っていたのにシャツは泥に染まっていたし、ストラックスの裾はビリビリに破れていた。

「今日も、大変だったんだね」

ハヤテは、不幸な少年である。きっと、ハヤテが落としたトーストは、必ずバターを下にして落ちるのだろうというくらいに、不運や不幸に遭遇する。マーフィーなんざくそくらえ。

「すごいよ。ハヤ太くんは」

「なにも、僕なんか……ただ我慢するのが取り柄になっちゃっただけですから」

ゆらゆらと、ストーブの火が揺れている。ハヤテは心地よさに少しだけ眠気を感じる。

「我慢できるってのはやっぱ凄いいことだと思う。でも、ちよっとくらいは、我慢しない練習をしてみてもいいのかもね」

「ふふ、今日の瀬川さんは本当に委員長みたいですわね」

「そうかな。まあ、いいんちよさんだからね」

「瀬川さんは、なんだか少し、変わりましたよね。ヒナギクさんに聞きましたよ。最近は勉強も熱心にされているとか」

「にはは。ちょっと照れくさいな。本当は、精一杯背伸びをしてるだけなんだけどね」

「背伸び、ですか」

「うん。私よりすごい人を真似してるだけ。さっきのよね、お母さんならこうやって私を励ましてくれるだろうって、想像しながら言ってみただ。ちょっとは、らしかったかな」

「……すみません、よく解りませんでした」

お母さんみたいだ。と言えなかったのは、ハヤテが本当の母親の、無償の愛を知らなかったからだ。

「やさしいお母様なのですね」

「うん。実際に言葉にするのはやっぱりクサくて、少し恥ずかしいんだけどね」

泉はきつと、良い母親になれるだろう。ハヤテには、泉が余りにも眩しく感じられた。

親に愛情を教えてもらえなかった自分は、きつと泉のように感情的な愛を伝達することが出来ないだろうから。

「正直、僕には瀬川さんがうらやましいです」

ハヤテは本音を漏らしてしまってから、後悔した。違う、こんなセリフを言ってしまったら場を悪くしてしまう。

「ハヤ太君は、そうやってもっといろんなことに怒ってもいい」

ハヤテの心配に反して、泉は、うっとり微笑むように目を細めて炎を眺めている。

「私にまで臆病になる必要はないんだよ。たまにはケンカくらいしようよ。友達なんだからさ」

「瀬川さんは、怖くないんですか」

「怖いに決まってるじゃん。でも、人の繋がりが、そんなに弱くないって信じているから。ハヤ太君だって、それは知ってるでしょ」

「……はい」

ハヤテは、三千院ナギを想う。傷つけてしまったのに、ハヤテを許してくれたご主人様。その時のナギとの不和は、まさしくハヤテとナギの拗れた信頼関係が原因であったが、しかしそれまでに築いた関係性が結局、最終的には二人の絆を繋ぎとめた。あれからもうずいぶん時を経たが、慙愧の念は今も消えていない。だからハヤテはかつてよりも固くナギに忠義を誓っている。

「……？」

ハヤテの指先に、泉の女の子の、華奢な指が触れる。慌ててハヤテが手を引っ込めようとする、その指はハヤテの小指を優しく絡め取った。

「まだ、冷たいね。知ってる？ 手が冷たい人は心が優しいんだって。ハヤ太君は、色々思いやりすぎなんだよ」
「重い考え方だとは、承知しているつもりです。ですから、押し付けるつもりはありません」

泉は、いいなあ。と言いたいのを堪える。やっぱりここは泉の場所ではないのだ。泉は冷たさを忘れないように記憶に刻みつけつつ、指を離れた。触れられたのに、認識できたのはやはり心の遠さだった。

「おもいって言葉が、質量の大きさを表すのと同じ音で構成されているのって、きつと偶然じゃないんだよ」

「行きすぎると潰れちゃうんですかね」

「知ってたけどさ……ハヤ太君って、案外聞き分けが悪いよね」

「嫌いになりましたか」

「いじわる。そんなわけないじゃん」

「いじめられるのが好きだって、おっしゃってませんでしたっけ」

「やだもー。えっち」

ころころと笑う泉。

ハヤテは泉の声が、血流に乗って体の末端まで広がっていくのを感じる。唐突に眠気が襲ってきて、ふあ、欠伸をしてしまう。口元を手で押さえるのを忘れていたのが恥ずかしくて、泉の方を見ると、泉も大きな欠伸をしているところだった。

泉の頬を、涙が伝う。悲しみとも喜びとも違う……特別な意味のない、当たり前前に流れただけの涙。

なのに、涙という単語が意識されてしまったせいで、ハヤテの中で勝手に価値が生じる。

その涙は、何も特別でないから、ハヤテにとって特別な涙になった。完璧な涙、という語彙が浮かんだけれど、いくらなんでも詩的に過ぎるし、それはきつと少し前に読んだ小説のせいだった。

「眠くなっちゃったね。インスタントで良ければ、コーヒーでも飲む？」

「僕が淹れますよ。ちゃんと砂糖多めで」

「む、またちよつと馬鹿にしないでしょ。そんな君には生徒会室の備品は触らせてあげません」

「計量だけはきちんとしてくださいね」

「大丈夫、目分量だけど気持ち的には有効数字三桁くらいで測ってくる」

「体重計で測った方が正確なんじゃないですかね……」

「それでもないよ。だってウチの体重計、この前と最近じゃ全然違う値出たし。びっくりしてお父さんに言ったら、ちゃんと修正してくれたんだけどね」

「……そうですか」

ひよつとしてそれは修正ではなく補正だったのではないだろうか。

「じゃ、ちょっと待っててね」

「はい、お願いします……」

台所へ向かう泉の後ろ姿は、以前よりも女の子らしい曲線が増えた気がする。次の健康診断が、ラーの鏡とまらないことを、祈るばかりである。泉にバレないように、ハヤテはひっそりと合掌した。



熱く、舌に広がる香ばしき。虫歯になりそうなほどの甘さが、ブラックを飲んだ時よりハヤテの頭に響いた。

「コーヒーって好きなんだ」

「……ええ」

材料、粉末コーヒー、お湯、砂糖、牛乳。

相槌を打つハヤテは、いかにも泉らしい味付けのカフェオレを、やはり秤は正確でないといけないう教訓とともに飲み下している。

「美味しくなかった？」

「いえ、美味しいです。とても」

「良かった。結構ヒナちゃんにも私の淹れたコーヒー、褒められるんだよ」

「なるほど……」

嗚呼、つくづく、女の子の体は甘いもので出来ている。

「時計塔って、すごく見晴らしが良いから。色んなものが美味しく感じられるよ」

「ヒナギクさんにも言っておあげてくださいよ」

「言いつけていいの？」

「……いえ、やはり前言撤回します」

「だよねー」

泉は、窓の外を見て呟く。

「星が、こんなに近いのに、勿体ないよ」

勿体ないから、泉はもっと近くへ行ってみたいと思っている。

「あのね。笑ってくれてもいいんだけど……私ね、宇宙飛行士になりたいんだ」

泉が進路希望に書いた夢。高すぎる理想である。

「現実的じゃないのは、解ってる。でもね、そうなりた
いって思ったの。だから、私は目指すの」

あまりにも幼稚な理屈。自分に嘘をつかなかったから
こそその高い理想。

「びっくりしましたけど、瀬川さんらしい感じがします。
でも、なぜ宇宙に？」

「多分だけど根っからの根無し草でもない限り、旅をす
るのって、帰るためだと思うんだ。遠く、遠くまで行っ
てみて、くたくたになって——ようやく自分の場所に帰
ってきたときに、ようやく旅になるんだよ」

『家に帰るまでが遠足』ってわけですか」

「色々ひっくりくるめて一言で纏めるなら『地球は青かった』
の方が近いかな。地球が物足りないわけじゃないの。地
球が大好きだから、宇宙に行くの」

「ものすごい遠回りですね……」

「あとは、ひよっとしたら宇宙人にも会えるかもしれない
いし。そしたらほら、私みたいなどにでもいる女の子
が一人くらいはいた方が友達になれるでしょ」

実は、ハヤテは宇宙人に会ったことがある。ちよっと
変わってはいいたが、普通に話せたし、泉なら簡単に友達
になってしまうのだろう。

「瀬川さんは、わざわざ宇宙人と友達になって、何をす
るつもりなんですか」

んー。と唇に手を当てて思案する泉。

「一緒に歌でも歌おうかな『ラブ&ピース』って感じの
歌」

阿呆である。この女、なにも考えてねえのである。確
かに、ハヤテが出会った宇宙人は友好的だった。しかし、
攻撃的な宇宙人に出会う可能性もある——むしろ、地球
人類の獰猛性を鑑みるなら、まずは出会いがしらに銃を
突きつけあう可能性の方が高い——のに、はなっから悪
い想像を除外している。人類同士でケンカしてるのに、
人類皆兄妹を唱え、その括りにタコみたいな宇宙人まで
ひっくりめてしまえる。だから、宇宙飛行士なんて突拍
子もない夢が浮かぶのだし、それを大真面目に語ってし
まえるのだ。

——物事の境界を度外視できる、どうしようもないほ
どの阿呆だから、人類の代表になってほしいと、ハヤテ
は思った。馬鹿馬鹿しくてもいい。起こりうることは起
こる。それがマーフィーの法則だ。

「宇宙飛行士、なれますよ。きつと」

「ん、ありがと。社交辞令でもそういつてもらえると嬉
しい」

「なつてください。僕は、応援していますから。協力は惜しみません」

「大丈夫。なるよ」

なにも根拠がないから、泉は断言した。泉は、大丈夫という言葉が、大好きだ。

「宇宙に着いたら、ハヤ太君にもメールを送るから。だから絶対、返信してね」

「光荣であります。未来の少佐殿」

ハヤテは冗談めかして、マグカップを軽く突きあげる。

「あはは。少佐、かあ。我ながら似あわないなあ」

泉は、ハヤテの乾杯に応じる。

甘いカフェオレ。コップ一杯のそのカフェオレに含まれる砂糖の粒子、あるいは分子の数を合わせれば、目に入られる程度の星空の数くらいには追いつけるだろうか。

ごくごくぐくと喉から音を立てて、泉はカップを一気に空にする。

唇を舐めると、砂糖に交じって鉄の味。「私は宇宙飛行士になる」と呟いて、つばを飲み込む。腹の中、カフェオレの銀河に、泉が流れ込んでいった。

了

著者あとがき & メッセージ

【ロッキー・ラックーンさん】

にゃんぱすー、RRです。合同本の刊行おめでとうございます。毎回毎回書きたいだけの事を書いて楽しませてもらうっております。

今回は「ご注文はうさぎですか？」とのコラボでした。タイトルはジョジョ第4部風です。

最初のネタ出しの段階では①きんいろモザイク②ひだまりスケッチの方が採用の可能性が高かったのですが、ヒナギクの実の両親が喫茶店をやったとかいう設定があったなーと思い出してごちうさに決めました。チャットルームの背景でチノちゃんが出てきた時には半分以上出来たのでセーフ。ココア、千夜、青山さんあたりは振り回し隊としてアリスちゃんと一緒にハヤテヒナギクをイジリ倒してくれるんだろうなあと次回作の事も考えつつなんとか間に合いました。

喫茶店って普段全く行かないのでオーダーの通しとかはネットで検索したものをチョコチョコと。喫茶店業務の知識について「ごちうさ」ではについて全く触れてないなと実感した瞬間でした。

さてさて一仕事を終えて、次は年末恒例（にしてもらった）アリスちゃんカップです。みんな参加してね！

【RIDEさん】

どうも、RIDEです。

今回も参加してもらいました。

この小説は、今までとは違うやり方でやって見ました。それまでは思いつきで書き進めていたのですが今回は「プロットを書く」↓「場面ごとにカードを書く」↓「カードを並べ、必要なつい気修正を行う」↓「本文を書く」という流れです。

しかし、途中で締め切りが迫っていき、計画が大幅に遅れてしまいました。

その結果、最後がちよっと不足感が残ってしまいました。もうちよっと計画的に動きたいと思うこのごろです。それでは。

【双剣士】

こんにちは、3年前の第3回以来の執筆権獲得となります双剣士です。せっかくのクイズ大会賞品枠に主催者が首を突っ込むのは申し訳ない限りなのですが、「○○さん素敵な作品をありがとう。そして双剣士さん、場所を提供してくれてありがとう」と引退した人扱いされる回数が増えてきたことに忸怩たるものがありましたので、第10回記念を口実に手を挙げてみました。次はないから許して♪

小説の方ですが、発行日が発行日なのでマリアさんメインにすることは早々と決まったものの、ストーリーは二転三転しました。原作が最終章に入ってしまったために、原作の日常から派生してエピソードを経て原作に戻ってくるという双剣士SSのパターンが使いにくいったらありやしない。七転八倒の末に『腹に一物を秘めた白マリアさんが意図せずして周囲を引っ掻き回す』という謎のストーリーが誕生しました。いまいち爽快感のないラストになってしまいましたが続編の予定はありません、あの後どうなるかは皆さんで想像してみてください。

そして今回は第9回に引き続き、挿絵イラストも担当させていた দিয়েおります。表情を描くとゲルニカになってしまう悪癖を隠すために、二人が揃って背中を向けているという「挿絵の意味あるの？」な構図にしてみました。春樹咲良さん、本当にごめんなさい。

【春樹咲良さん..小説掲示板から転記】

またしてもお久しぶりです。なんと、こちらの更新はほぼ1年ぶりになります。

1年全く更新がない、ということにならないようにとは思っていたのですが…。

掲示板の1ページ目に作品が残っている間に更新出来てよかったと思うことにします。

さて、1年越しで書くほど大した話でも無いのですが、今回は何となく前回の「アイスコーヒー」から話を繋げてみました。

書いている当人が基本的にコーヒー飲みすぎということもあって（このあとがきもコーヒー飲みながら書いている）、私の書く話の中では登場人物に特に意味もなくコーヒーを飲ませてきたのですが、その辺りから話を作れないかという試行錯誤の結果がこれ。

皆さんもカフェイン依存症には気をつけましょう。私は手遅れです。

今回は少し、改行の方法を変えてみました。長く間が空いたので、多少のスタイル変更くらいは許容できるかなと考えました。

ハヤテとヒナギクの会話以外の要素を削り落としているこの作品の性質上、どうしても舞台がマンネリ化しがちなので、何か打開策を考えたいなと思っるところです。

本編もナギ達が屋敷に戻ったり、2学期が始まったりしていますから、その辺をうまく取り入れられるといいなあ、などと。

それでは、次がいつになるかはわかりませんが、今後ともよろしく願っています。

【レン・リーさん】

the pillows と ふうバンドの、boat house という曲がありました。

世の中に嫌気がさして無人島に逃げ込んだ男が、彼のことを嫌いにならない変わり者の女の子と出会って、バカげた歌を歌って笑いあって、最後に告白するという大変モラトリアムな曲なのです。

タイトルの boat house の意味は「船を壊して家を建てた。後悔なんてしてないぜ」という歌詞からして、そこに居座る気満々だったのが、終盤になると「いつか僕がまともになれば、家を壊して船を作ろう」などと言い出していきます。モラトリアム……！（2回目）ダラダラ先延ばしにした青春ですよ。こういうの大好き（個人的解釈を含みます）。

ネタがないネタがないと苦しんだ挙句、ほかに書く人のいなさそうな2人で季節ネタを書いてみました。音楽を聞いてネタにしたらいんじゃないかとアドバイスをいただいて、何とか形にできました。うーん、疲れた。

最後になりましたが、クイズ大会お疲れ様でした。敗者復活でなんとか掠め取った（語弊のある表現）権利でしたが、なんとか責任を果たせてホッとしております。

次も頑張るぞい。

【ピーすけさん】

幸運なことに、クイズ大会にて西沢賞の栄光を頂くことが出来ました。

しかし、瓢箪から出た駒に意気揚々としていたはずなのに……気が付けば、切ギリギリ、方向性も定まらず、最後の最後までバタバタしていました。原稿を落とすことはありませんでしたが、深く反省。このあとがきも、べ切カウントダウンの中急いでタイピングしている始末。いや、お恥ずかしい限りでございます。なによりガンカタを取り込めなかったのが悔しくて悔しくて。

……閑話休題。

さて、SFは書けないと思っていたのに、気が付けば宇宙を強く意識した作品になっていました。本誌でいいんちよさんがこすもなーふとになりたい。と言っていたので、それをネタに甘酸っぱい感じで書いてみました。着地点を決めずに書いた（私にしては）珍しい例ですので、あっちこっち話題が飛んでいます。あまり意味は無かったりします。いいんちよさんって、計算して喋るタイプじゃなさそうですね。いっそもっとグダらせても良かったのかも（良くない）

なお、表題は私の造語。英語を訳してもちやんと日本語通りにならないところが、いかにもちよつと痛いラノベっぽくできたのではないかと自画自賛しております。

後書きが長くなってしまいました。本編の読みにくい文章を読んだ後に、さらにこの後書きまで読んで下さる方が一名でもいてくれることに感謝。

この反省を活かし、次はもっと読みにくくしたいと思えます。

編集後記

さてさて、クイズ合同本も10冊目を迎えました。節目の冊数といえは聞こえはいいのですが、さすがにメンバーも内容もマンネリ化が否めません。「自分の小説が縦書きになってるう」という感動は既に過去のものとなり、執筆するメンバーもほぼ限定され、有志合同本という新たな発表の場もできた現在の止まり木。もはや「クイズ勝者だけに差し上げる執筆権」というのは賞品としての魅力を失いつつあるような気がします。そろそろ新たな賞品を真剣に考える時期なのかもしれませんね。

ちなみに「ハヤテのごとく！」原作の方も、今冬から最終章に突入しました。同人編を15巻引っ張った畑先生のことですから単行本1冊や2冊で終わるとは思い難いですけど……でもアニメのほうも先日BDシリーズが発売されたそうで、商業的な意味での幕引きは既に始まっているように感じます。

悲しいことですが、楽しいときは何時かは終わります。私たちが新たなオタク坂を各々見つけ、別々の方角に向けて登り始めるのもそう先のことではないでしょう。しかし目の前にはまだ坂が残っています。12年越しの最終章という高い高い坂が。

さあ、我々も覚悟を決めて、ラストに向かって全力で突っ走りましょう！

奥付

書名…ひなゆめファンの止まり木・合同小説本 Vol.10

発行責任者…双剣士 (<http://soukenshi.net/mail/>)

発行日…2016年12月24日